

カルヴァンとスコラ主義

青木 義紀

序

「カルヴァンとスコラ主義」というフレーズは、撞着的 (oxymoronic) と受け止められるのが一般的である。つまり両者は無関係であるところか、両立し得ない概念と捉えられるのが常である。それには大きく三つの理由が考えられる。

第一の理由は、「スコラ主義」ないし「スコラの」(scholasticus) という用語の多義性と、その事実の無理解ないしは誤解に由来している。“scholasticus” という語は決して一様な用いられ方をしなかった。その多様性を理解せず、一面的な捉え方をしたことによって、カルヴァンとスコラ主義の関係を偏向、偏狭なものとしてきた面がある。

これと関連する第二の理由は、カルヴァン自身の発言に端を発している。カルヴァンは、『キリスト教綱要』の中で繰り返し「スコラ神学者」と称して中世カトリック神学者たちを指差し、批判を繰り返していた。二、三例を挙げれば、II:2:6で「このふたつの点を、ことのついでに注意しておきたかったのは、読者がスコラ神学者のうちの比較的健全な人たちと比べても、わたしがどんなに相違しているかを見ておかれるためだったのである」と述べて、スコラ神学者たちがいかに自らと神学的立場において異なっているか非難しているし、II:17:6では「キリストは御自身のために功績を得たもうたかどうか、ということの問題にしている人たちがいる。(これはロンバルドゥス「命題集」第3巻18—やスコラ主義者たちによってなされたとおりである。)このような定義をあえてくださことは、軽率であるに劣らず愚劣な好奇心である」と、スコラ主義者を名指しで批判している。他にも、II.ii.16、II.iii.11、III.ii.38-40、

III.iv.1・4・26・39、III.xi.13・15、III.xiv.11-12、III.xv.6、III.xvii.1・15、IV.xvii.13・15・30、IV.xviii.1、IV.xix.15・22・24・27 などにおいて「スコラ神学」や「スコラ神学者」という用語が用いられているが、その多くが批判の対象とされている。このような事実から、カルヴァンは徹底的にスコラ主義に批判的であると結論付けられたのである。

第三の理由は、一六世紀ルネサンス・ヒューマニズムと、中世から一七世紀正統主義へと至るスコラ主義が、相容れない運動とみなされてきたことに端を発している。そして、宗教改革運動をルネサンス・ヒューマニズムとの関係から論じる傾向が支配的だったため、この文脈に一面的に沿ってカルヴァンを解釈しようとする結果、ルネサンス・ヒューマニズムの影響を多大に受けたカルヴァンは、スコラ主義とは相容れない伝統の中にいると考えられてきたのである。ルネサンス・ヒューマニズムの観点からカルヴァンが解釈されてきたという事実は、ウィリアム・バウズマがカルヴァンの方法論をエラスムス的と理解し、アリストア・マクグラスがヒューマニスト的だと解釈している例を挙げるだけで十分だろう¹。勿論、カルヴァンがルネサンス・ヒューマニズムの多大な影響を受けていることは疑うべくもない。しかしこのことがすぐさまスコラ主義への嫌悪や全面的否定に直結するのかどうかは検討を要する課題だと思われる。つまり、ルネサンス・ヒューマニズムとスコラ主義は、相反する概念であって共存することはあり得ないのかという問いが再検討されなければならないのである。

本論の目的は、以上三つの理由が妥当性を持つかどうかを検討し、カルヴァンとスコラ主義の関係を問い直すことにある。むしろカルヴァンにおいては、「スコラ主義」が全面的に否定されているのではないこと、両者が撞着的関係にあるのではないことを明らかにする。ただ予め断っておくが、カルヴァン自身はその生涯の中でスコラの著作と分類できるものを一つも残していない。それゆえ、彼自身をスコラ主義者だったと結論付けるつもりは毛頭ない。ただ従来考えられてきたように、カルヴァンがスコラ主義を徹底的に批判し、「中世スコラ主義」と完全に決

別したかのような誤解を、歴史的文脈を踏まえて明らかにすることが、本論の狙いである。

この問題を取り扱うにあたって、上記三つの理由を順次検討していく。すなわち、第一に、「スコラ主義」ないし「スコラ的」という語の意味、用法、多様性に触れ、従来あまりにも偏狭的に理解されてきた「スコラ主義」の全体像を明らかにする。第二に、カルヴァンの「スコラ主義」の用法を検討し、その上で従来考えられてきた「カルヴァンはスコラ主義に対して批判的・否定的だった」という理解が妥当性を持つかどうかを明らかにする。第三に、ヒューマニズムとスコラ主義の関係を問い直し、両者が相容れない思想・伝統であるのかどうかを明らかにする。以上のような検証を経て、「カルヴァンとスコラ主義」の関係をより歴史的な文脈に照らして明らかにしたい。

1. 「スコラ主義」ないし「スコラ的」(scholasticus) という語の用法

ラテン語辞書の中で、一般に最も権威あるものと称される P.G.W. グレア編集の *Oxford Latin Dictionary* によれば、“scholasticus” という用語は、ラテン語 “schola”、ギリシャ語 “σχολη” に由来する。この語は、ある主題についての教師による解説、教師が解説を行なう場所すなわち学校、特定の教師や教授システムに従う生徒などを意味した。ここで重要なのは、「学校」を指す場合でも、「生徒」を指す場合でも、鍵となるのは、教師による「解説」や教師の「教授システム」である。ここから派生して、“scholasticus” は、修辞学校における議論や、そこにおいて用いられるスタイルや方法論を指す用語だと、辞書では説明されている。ドナルド・シネマは “scholasticus” という用語は、基本的に三つの意味において用いられてきたと指摘する。第一に学校に関する事柄を指し、第二に中世のスコラ主義を指し、第三に大学の教授スタイルや方法を指す言葉であるとしている。²つまり「スコラ主義」ないしは「スコラ的」という用語は、上記のグレアの辞書に照らせば、第三の「大学の教授スタイルや方法」を指す言葉であって、「学校全般に関する事柄」を指す第

一の用法や、「中世スコラ主義」を指す第二の用法はその派生と言わざるを得ない。本論で「カルヴァンとスコラ主義」と言う時、その「スコラ主義」が指す意味は、この教授スタイルや方法論についてであることをまず第一に断っておく。

この理解は、近年スコラ主義を研究する研究者たちによっても支持されている。例えば、現在一七世紀プロテスタント・スコラ主義研究の権威と評されるカルヴァン神学校のリチャード・ムラーは、「正統主義」(orthodoxy)という用語が、単純に「正しい教え」(right teaching)を意味し、教理や神学の内容を表現する用語であるのに対し、「スコラ主義」(scholasticism)という用語は、「正統主義」よりも狭い意味を持ち、「大学における教理の組織化・告白化のプロセスの専門的・学問的側面を表現している」と説明し、こちらは神学の内容ではなく、方法論を表現する用語³だとしている。この解釈は、オランダ・ユトレヒト大学のヴィレム・ファン・アッセルトやエフ・デッカーによっても支持されている。彼らは、「中世スコラ主義」(Medieval Scholasticism)について、この用語は「第一義的には、中世の時代に発展した教育や研究のための方法を指している」と説明しているし、「プロテスタント・スコラ主義」についても、「近年の研究は、プロテスタント・スコラ主義を、特定の内容というよりは、方法論的アプローチとして解釈している」と述べている⁴。

さらに、ファン・アッセルトやデッカーは、中世スコラ主義を形成した五つの要素に言及しているので、それを以下に紹介しておく。第一の要素は、ボエティウス(Boethius, 480-526)の著作である。「なぜなら、ボエティウスの著作が、論理学的方法と正確に定義された哲学的用語が、難解なキリスト教教理を明らかにし、教理の基本的要点を示す手段を提供することを示唆しているからである」と説明している。第二の要素は、カロリング・ルネサンス(Carolingian Renaissance, ca. 800)である。この時代に、古代のテキストや教会教父の著作への関心が高まり、各教区ごとに大聖堂附属学校(cathedral school)が創設され、テキストの欄外注に「グロッサ」(glossa ordinaria)と呼ばれる注釈を施す伝統が生ま

れたことを挙げている。第三に、これは古代にも見られたものではあるが、理性の活動とキリスト教信仰の統合を挙げている。特に、アンセルムス（Anselm, 1033-1109）の「我、知解せんがために信ず」（credo ut intelligam）という言葉に表された「知解を求める信仰」（fides quaerens intellectum）というアプローチの重要性に注目している。第四の要素は、一般的にこの要素の重要性が過度に強調され過ぎていると断りつつ、アリストテレスの著作に見られる知を挙げている。第五の要素は、ボローニャ、パリ、オックスフォード、そして少し遅れてケンブリッジなどに見られる大学の誕生である。

以上の要素を踏まえて、大学という学問的環境においてなされた教授活動が、端的にスコラ主義的方法と呼ばれたのである。中世の大学においては、大きく二つの要素によってこの教授活動が実践された。第一の要素は、講義（lectio）である。その主な内容は、聖書をはじめとする権威あるテキストの精読と、教師による注釈である。ここにおいて、文法や文体、語の意味などが指摘され、文章の意味が解説される。可能であれば、教父の著作への言及がなされて、解説に歴史的広がりや深みを加える。このような積み重ねが、聖書欄外注へのコメントとなり、「グロッサ」（glossa）の伝統を形成することにもなった。更に講義においては、単なる精読と注釈だけではなく、テキストから出てくる問題が取り上げられ、それに対する正しい解答が教師によって与えられる。

ここから、もう一つの要素が生まれる。それは討論（disputatio）である。⁶神学部における討論は、大きく二つから成る。一つは、一般討論（ordinatio）と呼ばれるもので、学生たちのために行なわれ、教師が選んだトピックについて議論が展開される。一般討論は大きく二つの討論から成る。第一の討論では、学生が二つに分けられ、一方は提示されたトピックへの反論を展開する。そして他方の学生がその反論に対する反論を展開して、自説を説明する。第二の討論では、出された賛否両論を教師が概説し、議論の解決を試みて結論付ける。もう一つの討論は、任意討論（quodlibet）と呼ばれるもので、広く一般に公開される討論会であ

る。⁷この討論会では、誰によって (a quolibet) 出された質問でも、どんな事柄について (de quolibet) の質問でも、取り上げられ議論される。

これらの討論会においてなされる質問 (quaestio) という形式が、スコラ主義的方法論の伝統において最も重要な役割を果たすことになる。⁸もともと、この質問というスタイルは、テキストが一見相矛盾するように見える時に、最終的な判断に至るために用いられた方法論であり、教父の時代から用いられていたものである。⁹このようなスタイルは、一つのテーマに関して、より確かな理解へと導くために意図された議論形式へと発展していく。これが後に “quaestiones” と呼ばれる一つのジャンルを形成するようになる。この質問形式 (quaestio) においてなされる整った議論は、“disputatio” あるいはより正確には “quaestiones disputatae” と呼ばれるようになる。基本的な構造としては、まずトピックに関する質問が投げ掛けられ、それに対する反論が幾つか紹介される。その後、自らの主張が展開されて、最終的に結論が導き出され、最後に反論への応答が展開される、という形式である。

もっとも、スコラ主義的方法論は、以上のような「質問形式」に限定される訳ではない。スコラ主義的方法論の精神を描写した標語に、“Bene docet, qui bene distinguit”¹⁰という言葉がある。直訳すれば、「よく区別する者こそが、よく教える者である」(He teaches well who distinguishes well) という意味になるが、ここにスコラ主義的方法論の重要な点が二つ描き出されている。一つは、スコラ主義的方法論の最も重要な課題が「区別すること」(distinguere)¹¹にあるという点である。区別することによって、扱うテーマや用語が「何であるか」あるいは「何ではないか」が明らかとなり、より明確で確かな答えが導き出されることになる。もう一つは、この標語にスコラ主義的方法論が目指す目的が示されている。それは「教えること」(docere) である。スコラ主義的方法論は、修道院や教会附属学校、そしてより端的には大学といったアカデミックな環境で、学問的教授のために採用された方法論なのである。

以上のように、スコラ主義とは、教理や神学の内容を表現する用語で

はなく、大学などのアカデミックな環境で用いられた学問教授のための方法論なのである。同じ中世スコラ主義の伝統に立つ神学者でも、アルベルトゥス主義 (Albertism)、トマス主義 (Thomism)、スコトゥス主義 (Scotism)、オッカム主義 (Ockhamism) などと呼ばれる人たちがいるのはそのためである。つまりこの事実は、同じスコラ主義的方法論を採用しつつも、その神学的内容や主張には違いがあることを表している。このようなことから、スコラ主義という言葉が、神学や教理の内容を表現する言葉ではなく、方法論を指す言葉であることは明らかである。

2. カルヴァンの「スコラ神学」批判

序論において、『キリスト教綱要』におけるカルヴァンの「スコラ神学」ないしは「スコラ神学者」への言及に触れた。その用法は極めて否定的かつ批判的であった。しかしここで立ち止まって考えなければならないのは以下の諸点である。第一に、『キリスト教綱要』におけるカルヴァンの「スコラ主義」への言及が、すべて否定的かつ批判的なものであるかどうかということが精査されなければならない。第二に、『キリスト教綱要』以外の説教や注解などの諸著作において、カルヴァンが「スコラ主義」についてどう言及しているか、更に「スコラ主義」と関連するアリストテレスの思想や概念をどのように扱っているかという問題が確認されなければならない。第三に、カルヴァンが批判する「スコラ主義」が一体何を指しているのか、その批判の矛先を特定しなければならない。特に、カルヴァンが『キリスト教綱要』の中で「スコラ神学者たち」と名指しで批判しているのは、彼らの神学的方法論 (theological method) なのか、それとも神学的内容 (theological contents) なのかという問題が解決されなければならないのである。もし「神学的方法論」が批判の対象だとすれば、カルヴァンは文字通り「スコラ主義」そのものを全面的に否定したということになり、「カルヴァン」と「スコラ主義」の両者は、互いに相容れない撞着的 (oxymoronic) 関係にあるということになる。しかしもし「神学的内容」を批判の対象にしていたと

なれば、むしろスコラ主義の中の、特定のある教理内容を主張するグループを批判しているのもあって、少なくとも両者は必ずしも全面的に相容れない関係とは言いきれなくなるからである。以上の要点を踏まえて、第一に『キリスト教綱要』における「スコラ主義」への言及に触れる。

a. 『キリスト教綱要』

カルヴァンは、一五五九年のラテン語最終版『キリスト教綱要』において「スコラ神学者たち」(scholastici) という用語を二四回使っている。「学派(学校)」(quae in scholis) という用法も入れれば三〇回程になる。一五三九年のラテン語第二版において使われたこの語の用例はすべて、ほぼそのまま一五五九年版に継承されているような形で、一五六〇年のフランス語最終版に並行している¹²。その他、一五四三年版で初めて使われる例や、一五五九年に付加される用例も若干ある。ここで、フランス語版への翻訳について指摘しておきたい。

ラテン語“scholastici”が、単純にフランス語“scolastiques”と訳されている例は一三回、“Theologiens Romanisques”と訳されている例が一回、“Escoles”と訳されている例が一回、“(theologiens) Sophistes”と訳されている例が二回、そして“(theologiens) Sorbonniques”と訳されている例が七回ある¹³。ムラーは、これらの翻訳作業の文体上の特徴を二つ挙げている。第一は、カルヴァンがラテン語“scholastici”という言葉で、ペトロス・ロンバルドゥスやその他の未特定のスコラ主義者に言及する場合はすべて(II.ii.4; II.ii.16; II.xvii.6; III.iv.26)“scolastiques”という仏訳を当てているということである。但し、唯一の例外はIII.ii.43。(ムラーはIII.iii.43.と記しているが、これは誤記)で、ここにおいてロンバルドゥスの教説が、後代の学派の誤用と対比するかたちで言及されており、“in scholis”は、“ez escolles des Sophistes, c'est à dire Sorbonniques.”と表現されている。第二は、カルヴァンの“scholastici”への言及が全面的に否定的ではない場合、それらは、アウグスティヌスの定義

のスコラ主義的採用や (II.ii.4.)、「スコラ神学者の比較的健全な人たち (saniores scholastici)」(II.ii.6, III.xiv.11.¹⁴)、そしてより慎みのある穏健な形のスコラ主義者たち (IV.xvii.13) を指していて、この時カルヴァンは、必ず “scolastiques” と仏訳するのであって、「ソルボンヌ」(Sorbonistes) とは決して訳さない。つまり、ロンバルドゥスに代表される古き時代のスコラ主義に言及する場合、カルヴァンは決まって “scholastici” や “scolastiques” を使うのであり、他方ロンバルドゥスには言及せずに新時代のスコラの誤用に言及する時に、カルヴァンは極めて頻繁にそれを「ソルボンヌの神学」と特定するのである。以上の分析からわかることは、“scholastici” という用語そのものに否定的なニュアンスがある訳ではなく、あくまで否定的に使われる例と肯定的に使われる例とが¹⁵あって、この用語自体は中立的だということである。

ここで重要なことは、カルヴァンは多くの場合、自分とは異なった神学的立場を採用しているとして「スコラ主義神学者たち」に言及しているが、いくつかの例においては、自分と同じ立場に立っていると明言している例があるという点である。以下に二点、その例を挙げる。第一の例は、『キリスト教綱要』II.ii.16. である。

II.ii.16:

「なぜなら、アウグスティヌスは、もっとも真実に、次のように教えているからである。(われわれが語ったように、『命題集』の教師とスコラ主義者たちもこれに同意しないわけにはいかなかった。) いわく、『値なしに人間に与えられた賜物は、墮落ののちには取り去られたのであるから、自然的な賜物は残ったが、これらは腐敗した』と。」

(1539) “coactus est magister Sententiarum...”

(1559) “coacti sunt Magister sententiarum et scholastici ut gratiuta homini dona post lapsum”

(1541) “laquelle le Maistre des Sentences a esté contrainct

d'approuver”

(1560) “Car ceste sentence que nous avons allequée de S. Augustin est tresvreye, laquelle le maistre des Sentences & les Scolastiques ont esté contreinst d'approuver.”¹⁶

この箇所は、II.ii.12からの文脈で理性について言及している。墮落によって理性は完全に消し去られてはいないものの、「部分的に弱り」、「部分的に破壊されて」、「損なわれた形でしか残っていない¹⁷」と言われている。つまり、一方で人間は知性を与えられているので理性的であり、この点で野獣とは異なるのであるが、しかし他方でこの知性の光は、墮落によって有効に現われることができない状態にある。この状態をよりよく理解するためには、「地上的な事柄」(res terrenas)と「天上的な事柄」(res coelestes)¹⁸の区別が必要となる。前者において神は、例えば罪によって墮落していたとしても、神は人間の本性に多くの良きものを残しておいて下さったのである。そしてそれは、聖化とは別の聖霊の賜物であるとカルヴァン言う。

しかしこのような、墮落以後の「地上的な事柄」に関する未信者の業績や仕事の有用性を認めつつも、カルヴァンは、「このような理解力の全体も、それにともなう理解も、固い真理の基礎の上に据えられていないならば、神の前には流れ去り、消え失せるに過ぎない¹⁹」と結論付けている。そしてその論拠としてアウグスティヌスの以下の言葉を引用し、それにロンバルドゥスも、スコラ学者たちも同意していると述べているのである。すなわち「値なしの人間に与えられた賜物は、墮落ののちには取り去られたのであるから、自然的な賜物は残ったが、これらは腐敗した²⁰」。

ここでカルヴァンは、墮落の結果、創造時に人間に与えられた賜物がどうなったかという具体的な教理について扱っている。そしてこの点については、スコラ主義者たちもアウグスティヌスに同意し、自分たちと同じ立場に立っていたということを明らかにしているのである。

第二の例は、この箇所直後にある II.ii.26 である。

II.ii.26:

「なぜなら、スコラ神学者たちも、理性がその反対のことをか
えりみるところにおいてでなければ『自由意志』の働きは成立
しないと認めているからである。」

(1539/59) “Nam et scholastici fatentur nullam esse liberi ar-
bitrii”

(1541/60) “Car les theologiens Scolasticques mesmes confes-
sant qu'il n'y a nulle action du franc Arbitre.”²¹

II.ii.12-25 は、墮落の結果としての「理性」について扱い、II.ii.26-27 は「意志」について扱っている。一般的に「万物は自然の衝動によって善を欲求する」と考えられているが、この欲求の中に「自由意志」の力を考えるべきではないとカルヴァンは主張する。そしてここで、自分と同じ立場に立っているとしてスコラ神学者たちに言及しているのである。

以上二つの例からも明らかな通り、カルヴァンは「スコラ神学」の神学的内容のすべてを否定的・批判的に捉えている訳ではなく、むしろ彼らと教理的に同じ立場に立っていると認めている箇所も存在しているのである。尚、巻末付録として、『キリスト教綱要』における「スコラ主義」への言及と、当該箇所のラテン語版、フランス語版のテキスト、そして簡単な筆者のコメントを付したので詳しくはそちらを参照されたい。

b. その他の著作

続いて、『キリスト教綱要』以外の著作で、「スコラ主義」がどのように扱われているかを検討する。一五五四年二月二六日から始められ、全部で一五九回²²を数えたとされる『ヨブ記説教』の中で、カルヴァンは「ソルボンヌの学者たち」の教えを「地獄において鍛造された悪魔的冒涇」

と吐き捨てている。²³それは、彼らが神の絶対的力 (potentia absoluta) を無法と同一視し、神を御自身の義に反して絶対的力を行使する暴君のように捉える傾向があるからである。²⁴ここでカルヴァンは、決して「スコラ主義」全般を非難しているのではないことは明らかである。むしろ批判の矛先は、神の超越性や絶対的力の問題について、極端な立場を取る中世後期の唯名論者に向けられているのである。²⁵

さらに興味深いのは、一五五七年二月一四日付でジーン・ビュデ (Jean Budé) によって書かれ、カルヴァンの『小預言書講義』に付された序文である。ここに、次のようにカルヴァンが評価されている。

カルヴァンは、耳に心地良く、自己顕示と自らの栄光のために、言葉の空虚な華麗さによるよりも、真の意味を明瞭かつ平易にすることによって、聴衆に涵養と益を促すことを望んだ。同時に私は、これらの講義が、修辭的なスタイルでなされたというよりも、スコラ的スタイルでなされたことを否定しない。²⁶

ここには、ルネサンス・ヒューマニズムに代表される修辭的 (oratorius) なスタイルと、中世から続く伝統的なスコラ主義に代表されるスコラ的 (scholasticus) スタイルの対比がある。この問題については次章で詳しく扱うことになるが、ここで重要なことは、カルヴァンの一連の『小預言書講義』が前者ではなく、後者でなされたとビュデは評している点である。これはあくまで第三者の評価であるので、カルヴァン自身がこの評価についてどういう意見を持っているかという問題はあるが、少なくともこの評価が自らの著作の序文に付されることを厭わなかったということだけは言えるのではないかと思う。

また、カルヴァンが一五五九年に創設したジュネーヴ・アカデミーの『規程』によれば、アカデミーでは、「弁証論」、「命題の性質と議論のしかた」、「賓位語、範疇、主題、総論」などが教授され、アリストテレス²⁷が用いられたりしている。またテオドール・ド・ペーズの学長就任演説

では、学生が中世の“scholastici”のように扱われ、学び舎は“respublica scholastica”²⁸と捉えられている。

このように、カルヴァンやベザにおいて「スコラの」(scholasticus)という言葉が、必ずしも否定的・蔑視的にのみ使われているのではなく、肯定的・積極的に使われている例も見られるという事実は特筆に価する。

さらに興味深いのは、カルヴァンが聖書注解においてアリストテレスの因果律の概念を積極的に用いて、聖書の解説に援用している点である。二点のみ指摘するが、まず第一に、『ローマ書注解』の中で、3:22の「神の義」(Iustitia, inquam, Dei)という言葉を解説し、「今やあなたは、信仰の義とは神の義である、ということを見る」と述べている。そして次のように続ける。

そのような訳で、われわれが義とされることについて、その(いわゆる)動力因は神の憐れみであり、その質料因はキリストであり、その手段は信仰と結び合わさった御言葉である。それゆえ、「信仰が義とする」と言われるとき、それは、この信仰こそわれわれがキリストを受け入れる手段だからである。すなわち、このキリストの義にわれわれはあずからせられるのである。²⁹

第二に、『エペソ書注解』1:4でカルヴァンは、「ここでかれは神の永遠の選びを、われわれの召命についてばかりでなく、われわれが神から受けるすべての幸福の基礎および第一原因としている」と述べる。³⁰さらに1:5では、「かれはここでわれわれの救いの原因を三つ述べ、さらに少し後で第四のものを付け加えている」として、次のように述べる。「動力因は『み旨のよしとするところ』であり、質料因は『キリスト』である。そして目的因は『恵みをほめたたえること』である」。³¹さらに1:8では、第四の原因である形相因に触れて、「こんどは形相因、すなわち神の慈愛がそれによって豊かにわれわれのうえに流れ出る福音の宣教の問題である」³²と述べている。

以上、二つの聖書注解を例に挙げたが、いずれも人間の救いに関わる原因（要因）に言及されている。これらの箇所でも扱われている「動力因」（causa efficiens）、質料因（causa materialis）、「目的因」（causa finalis）、「形相因」（causa formalis）、「第一原因」（causa prima）などの用語は、明らかにアリストテレスの因果律の概念である。³³ 一方でカルヴァンは、アリストテレスの重要な教説をきっぱりと拒絶している。これについては一例を挙げるだけで十分であろう。例えば、アリストテレスは世界の永遠性という教説を主張しているが、カルヴァンはこれを「無からの創造」（creatio ex nihilo）の教理の故に拒絶している。³⁴ しかし他方で、因果律の概念に見られるように、聖書の解説のためにアリストテレスの概念を援用しているのである。この点で、スタインメッツの「キリスト教スコラ主義が採用するアリストテレスは、キリスト教神学によってパプテスマを受け、純化され、正されたアリストテレスであり、彼の最も頑固な異教的信念は剥ぎ取られたのであった」という分析は正鵠を射ている。³⁵

このように、カルヴァンの「スコラ主義」やアリストテレスへの言及は、決して一面的に否定的・批判的な態度で一貫しているのではない。むしろ事態はもっと複雑であって、批判的な面と肯定的な面とが混在していると見るのが妥当である。

c. カルヴァンの「スコラ主義」批判の矛先

さてここからは、カルヴァンの「スコラ主義」への批判的言及に焦点を合わせて、その矛先がどこにあるのかを考察する。つまり、その批判の焦点は「スコラ主義者」たちの「神学的方法論」にあるのか、それとも「神学的内容」にあるのかという問題である。詳しい分析は、巻末に付した「スコラ主義者」への引用と、そこに付したコメントに譲るが、ここではそれらを踏まえた結論のみに言及して先を急ぐこととする。

カルヴァンの「スコラ主義」への批判の矛先は、決して彼らの神学的方法論や、方法論に裏付けされたスコラ主義全般に向けられたものでは

なく、具体的な神学的内容や教理、あるいはそれらを奉じる特定のスコラ主義神学者たちに向けられたものであった。またそれらの教理を一つ一つ取り上げてわかることは、その批判の殆どが一六世紀当時のローマ・カトリックの教理に受け継がれたものであるという点である。「スコラ神学者たち」というカルヴァンの批判は、「ローマ・カトリックの神学者たち」と言い換えても文意が通じるほどで、むしろカルヴァンは、両者をほぼ同義的に用いていると言っても過言ではない。

また興味深いのは、「スコラ主義」への言及が、『キリスト教綱要』第一篇には皆無である点である。この事実もまた、カルヴァンの「スコラ主義」批判が、特定の教理に集中しているのであって、スコラ主義全般に向けられたものでないことを示唆していると言える。

3. ルネサンス・ヒューマニズムとスコラ主義

一九世紀の歴史家をはじめ、多くの研究者はルネサンス・ヒューマニズムとスコラ主義は相対立する知的運動だと理解した。³⁶そしてカルヴァンは、ルネサンス・ヒューマニズムの伝統を色濃く継承していると解釈されるので、³⁷その結果、スコラ主義とは相容れない伝統に立っていると結論付けられてきたのである。確かに、ヒューマニズムの立場からスコラ主義への批判や、両者の論争が一六世紀に存在したのは事実である。³⁸しかしより長い歴史的文脈で捉えるなら、両者は長く共存してきた歴史があり、ルネサンス期の論争はその長い共存の歴史の一出来事に過ぎないのである。このようなスコラ主義とヒューマニズムを対立的に捉えようとする解釈にアンチテーゼを唱える学者が近年増えてきている。代表的な研究者としては、ジェームス・オーバーフィールドやポール・オスカー・クリステラーなどが有名である。³⁹

そもそも「ヒューマニズム」とは何か、それをどう定義し、どう捉えるかという問題が、なかなか複雑な問いである。クリステラーは、ルネサンス・ヒューマニズムを哲学的な傾向や体系ではなく、文化的・教育的プログラムと捉えている。⁴⁰これに対して、より広義の解釈を提唱する

学者たちもいる。⁴¹ ロバート・リンダーは、両者を区別して、前者を「特定ヒューマニズム」(particular humanism)、後者を人間の能力や行動に関心を寄せた「一般的ヒューマニズム」(general humanism)と呼んでいる。リンダーによれば、前者に比して後者は、人間の尊厳に関係し、ルネサンス期の詩、劇、音楽、絵画、聖書、哲学などに広く表されたもの⁴² としている。バウズマやアラン・ドゥフォーなどは、クリステラーに代表される狭義 (au sens strict) の解釈ではなく、広義 (au sens large) の解釈を主張しているが、⁴³ スティーブン・オズメントは、狭義のヒューマニズムは簡潔・単一の定義を拒んでいるとしつつも、それは定義可能で顕著な特徴を有しているとして評価している。そのオズメントが、最も基本的なヒューマニズムの特徴を、古典的著作を原語で直接読み、一次資料の研究を学問的カリキュラムの一番の核としている点に見ている。⁴⁴ 我々としては、ヒューマニズムの多様性を認め、「特定ヒューマニズム」と「一般ヒューマニズム」の区別を踏まえつつ、両者をそれぞれ評価したオズメントの理解に、ヒューマニズムの基本的な特徴を見出すことに賛同したい。

さて、そのヒューマニズムとスコラ主義は、それぞれ古代の伝統を継承している。ヒューマニズムは修辞学 (rhetoric)、スコラ主義は論理学 (dialectic) の伝統である。中世においては、論理学が顕著となり影響力において修辞学を凌駕したが、ルネサンス・ヒューマニズムの勃興によって、両者の教育的・知的確執の關係に新しい一ページが開かれたことは一般に理解されている通りである。ただ重要なことは、中世において修辞学は決して根絶しなかったし、ルネサンス期においても論理学は決して消滅した訳ではなかったという事実である。両者の關係は、時代と共に変化してきたが、基本的には両者が共存してきた事実は忘れられてはならない。

さらにもう一つ重要なのは、ヒューマニズムもスコラ主義も、それらが特定の教理的・思想的内容を指す運動ではなく、基本的には方法論を指す運動であるという点である。その結果、各運動内に共通した一定の

哲学的・神学的教理を見出すことはできない。⁴⁵むしろどちらの運動にも、教理的・実践的な内容においては多様性が見出せるのである。それ故、ヒューマニストとスコラ主義者が、方法論の違いを乗り越えて、同じ教理や哲学的内容を主張するということはあり得るのである。⁴⁶

また近年、カルヴァンとほぼ同時代人であるピーター・マーター・フェルミグリ (Peter Martyr Vermigli, 1499-1562) のような改革派神学者の神学においては、ルネサンス・ヒューマニズムとスコラ主義の共存が見られると指摘されている。⁴⁷このような同時代人の例も、カルヴァンにおけるヒューマニスト的要素が、スコラ主義を排除する原因とはなり得ない可能性を支持する一助と言える。

ムラーは、カルヴァンの『キリスト教綱要』の話題が広範囲にわたり、時に話題があちこちへと飛んで散漫になる流れにおいて、それが基本的にスコラ的なパターンではないことを認めつつも、主張の陳述、それへの反論、そしてそれに対する返答という議論の展開が、ヒューマニズムのモデル同様スコラ的なモデルの観点から、少なくともカルヴァンの主張の流れを理解する明確な可能性を示唆していると述べている。その上で、カルヴァンの修辞が基本的に上記のような主張、反論、結論という形で形成される三段論法として理解される限り、「ヒューマニズム的修辞とスコラ的議論の対立という想定は、カルヴァンの著作には全く当て嵌まらない」⁴⁸と断言している。

結論

以上、「スコラ主義」(scholasticus) という用語の考察、カルヴァンの「スコラ主義者たち」(scholastici) への言及の精査、そして「ルネサンス・ヒューマニズム」と「スコラ主義」の関係を取り扱ってきた。「スコラ主義」と「ヒューマニズム」が、どちらも特定の教理や、神学的・教理的内容を示唆するものではなく、あくまで方法論に代表される用語であることが明らかとなった。そしてカルヴァン自身の「スコラ主義」への言及が、一概に批判的・否定的なものではなく、積極的・肯定的なもの

があること、更には批判的言及においても、それはスコラ主義の方法論や、スコラ主義全体を一括して批判しているのではなく、ある特定の教理やそれを主張する特定の人物たちに向けられたものであることが明らかとなった。

勿論、カルヴァン自身がスコラ主義的方法論を用いているとか、ましてや彼がスコラ神学者であったと結論付けるつもりは毛頭ない。ただ彼が全面的にスコラ主義を否定している訳でも、彼の神学や思想が本質的にスコラ主義と撞着的で相容れないものであるという訳でもないということは、少なくとも結論付けられると言える。むしろ、一六世紀の文脈においてスコラ主義は、決して根絶した訳でも影響力を全く失った訳でもなく、脈々とヒューマニズムと共に生き続け、カトリック、プロテスタントの別なく当時の神学者や宗教改革者たちに、様々な形で影響を与えていたと考えるのが妥当である。

APPENDIX

『キリスト教綱要』(1539-60)における“Scholastici”の用例⁴⁹

II.ii.4:

「そういうわけでペトルス・ロンバルトゥスとスコラ主義者たちは、アウグスティヌスの定義を受け入れるほうを選んだ。」

(1539/59) “Itaque Petrus Lombardus et Scholastici Augustini definitionem magis amplexi sunt...”

(1541/60) “Pourtant le Maistre des Sentences & les docteurs scolastiques ont plustost receu celle de S. Augustin...Thomas d'Aquin pense que ceste definition seroit bonne...”⁵⁰

II.ii.4. では、「人間は、ただ感覚的な部分において腐敗しているだけであって、理性は全くそこなわれていず、意志も大部分そこなわれていない」という主張が、いかに古代教父たちの間でなされていたかということ論じている。そして、アウグスティヌスの主張を「『自由意志』とは、『理性』と『意志』との機能であり、恵みによって助けられるときには善を選択し、恵みをもたないときには悪を選択するものである⁵²」として、カルヴァンは、ロンバルドゥスとスコラ主義者たちが、この定義を選んだとしている。つまり、「この恩寵なしには、意志はそれ自体では十分でないように、彼らには思えたのである」(sine qua voluntatem sibi per se non sufficere videbant.)。

しかし重要なのはこの後である。「けれども、かれらはもっとすぐれていると見、あるいはいっそうくわしい説明をするためによいと見たため、かれら自身の考えを持ち出す」と言って、スコラ主義者たちがアウグスティヌスの定義から離れていくことをカルヴァンは述べているのである。⁵³そしてこの立場として具体的にトマス・アクィナスの名前を挙げて、彼が「『自由意志』とは『知性』と『意欲』との混合からなり、しかし、むしろ意欲に傾いている『選択力』とする」立場であることを明らかにする。つまり、ここで言われている「スコラ主義者」というのは、

このトマス・アクィナスの理解に立つ中世の神学者たちのことなのであり、このトマスの「神学的内容」に賛同する特定のスコラ主義者たちを指しているのである。

II.ii.5:

「ところで、スコラ学派の間では、三種の自由を数えあげる区分法がとられている。第一は必然からのそれ、第二は罪からのそれ、第三は悲惨からのそれである。このうち第一のものは、人間のうちに生来固着していて、いかにしてももぎとることはできないが、他のふたつは罪によって無にされた、というのである。」

(1559) “Obtinuit autem in scholis distinctio, quae triplicem libertatem numerat: a necessitate primam, secundam a peccato, tertiam a miseria; quarum prima sic homini naturaliter inhaereat ut nequeat ullo modo eripi, duae alterae per peccatum sint amissae.”

(1560) “Outreplus il y a une autre distinction receue des escolles de Theologie, en laquelle sont nombrées trois especes de liberté. La premiere est, delivrance de necessité: l'autre, de peché : la troisieme, de misere. 3) De la premiere, ils disent qu'elle est tellement enracinée en l'homme de nature, qu'elle ne luy peut estre ostée.”⁵⁴

この発言の直後、カルヴァンは「この区分をわたしは喜んで受け入れる。ただし、これが『必然』と『強制』とをあやまって混同している点だけは別である」と述べて、部分的ではあるにしても、スコラ神学者たちのこの区分に賛同していることを告白している。

II.ii.6:

「このふたつの点を、ことのついでに注意しておきたかったのは、読者がスコラ神学者のうちの比較的健全な人たちと比べても、わたしがどんなに相違しているかを見ておかれるためだったのである。ましてや、わ

たしは、なおいっそう近ごろの詭弁家たちからはへだたっている。」

(1539/59) “iam, lector, quantum a sanioribus Scholasticis dissentiam.

Longior enim intervallo a recentioribus Sophistis differo”

(1541/60) “en quoy je discorde d'avec les docteurs scolastiques qui ont tenu une doctrine plus entiere que n'ont faict les Sophistes qui ont venuz après...”

ここでは、ロンバルドゥス『命題集』II.26.1. に表された「二重の恩寵」(duplex gratia) の教理が扱われる。すなわち、「働く恩寵」(operans) と「共に働く恩寵」(cooperans) である。前者は、私たちに善を欲する意欲を起こさせる神の恩寵であり、後者は前者の意志を助け続ける恩寵である。カルヴァンはこの教理が、「神の恩寵」とは言うものの、結局は人間の意志が中立的な形で存在していることになっていることを見抜き、恩寵に従うのかそれとも恩寵を放棄して無効にするのかの最終決定の権能を、人間の自由意志が持っていると分析している。この点について、「スコラ神学者のうちの比較的健全な人たちと比べても」、いかにカルヴァンの立場が遠く隔たり異なっているかということを表している。つまりこの箇所では、「二重の恩寵」という具体的な教理を主張する特定のスコラ主義者たちを念頭に入れているのであって、決して「神学的方法論」としてのスコラ主義に言及しているのではない。

II.ii.16:

「なぜなら、アウグスティヌスは、もっとも真実に、次のように教えているからである。(われわれが語ったように、『命題集』の教師とスコラ主義者たちもこれに同意しないわけにはいかなかった。) いわく、『値なしに人間に与えられた賜物は、墮落ののちには取り去られたのであるから、自然的な賜物は残ったが、これらは腐敗した』と。」

(1539) “coactus est magister Sententiarum...”

(1559) “coacti sunt Magister sententiarum et scholastici ut gratiuta homini dona post lapsum”

(1541) “laquelle le Maistre des Sentences a esté contrainct d'approuver”

(1560) “Car ceste sentence que nous avons allequée de S. Augustin est tresvraye, laquelle le maistre des Sentences & les Scolastiques ont esté contreinst d'approuver.”⁵⁶

この箇所は、II.ii.12からの文脈で理性について言及している。墮落によって理性は完全に消し去られてはいないものの、「部分的に弱り」、「部分的に破壊されて」、「損なわれた形でしか残っていない」と言われている。⁵⁷つまり、一方で人間は知性を与えられているので理性的であり、この点で野獣とは異なるのであるが、しかし他方でこの知性の光は、墮落によって有効に現われることができない状態にある。この状態をよりよく理解するためには、「地上的な事柄」(res terrenas)と「天上的な事柄」(res coelestes)⁵⁸の区別が必要となる。前者において神は、例え罪によって墮落していたとしても、人間の本性に多くの良きものを残しておいて下さったのである。そしてそれは、聖化とは別の聖霊の賜物であるとカルヴァン言うのである。

しかしこのような、墮落以後の「地上的な事柄」に関する未信者の業績や仕事の有用性を認めつつも、カルヴァンは、「このような理解力の全体も、それにとまなう理解も、固い真理の基礎の上に据えられていなければ、神の前には流れ去り、消え失せるに過ぎない」と結論付ける。⁵⁹そしてその論拠としてアウグスティヌスの以下の言葉を引用し、それにロンバルドゥスも、スコラ学者たちも同意していると述べているのである。すなわち「値なしの人間に与えられた賜物は、墮落ののちには取り去られたのであるから、自然的な賜物は残ったが、これらは腐敗した」。⁶⁰

ここでカルヴァンは、墮落の結果、人間に与えられた賜物がどうなったかという具体的な教理について扱っている。そしてこの点については、スコラ主義者たちもアウグスティヌスに同意し、自分たちと同じ立場に立っていたということを明らかにしている。

II.ii.26:

「なぜなら、スコラ神学者たちも、理性がその反対のことをかえりみるところにおいてでなければ『自由意志』の働きは成立しないと認めているからである。」

(1539/59) “Nam et scholastici fatentur nullam esse liberi arbitrii”

(1541/60) “Car les theologiens Scolasticques mesmes confessent qu'il n'y a nulle action du franc Arbitre.”⁶¹

II.ii.12-25 は、墮落の結果としての「理性」について扱われ、II.ii.26-27 は「意志」について扱われる。一般的に「万物は自然の衝動によって善を欲求する」と考えられているが、この欲求の中に「自由意志」の力を考えるべきではないとカルヴァンは主張する。そして同じ立場に立っているとして、スコラ神学者たちに言及しているのである。

II.ii.27:

「そして、このような見解は、オリゲネスと古代教会のいくたりかの人々から借りて、スコラ神学者たちに共通して受け入れられるようになったものであることは疑いない。」

(1539/59) “ab Origene, et veterum quibusdam sumptam, Scholastici communiter amplexi sint”

(1541/60) “Il n'y a point de doubte que les scolastiques n'ayent communement receu ceste opinion, comme elle leur estoit baillée de Origene.”⁶²

神が最初に与えた恩寵によって、人間は有効に意志することができると考えている人々として、オリゲネスや古代教父、そしてスコラ神学者たちに言及されている。つまり、この具体的な教えを主張する人々に対して、カルヴァンの反論がここでは展開されているのである。

II.viii.56:

「そういうわけで、最も有害、最も無知、最も狡猾なのはスコラ学者ど

もがくだす解釈である。」

(1539/59) “Vel ignorantiae, vel malitiae fuit, quod Scholastici ex praeceptis de non appetenda vindicta”

(1541/60) “Parquoy ce a esté une ignorance, ou malice pernitieuse, que les docteurs scolastiques, des commandements que nostre Seigneur a baillez...”⁶³

II.viii. では律法が各戒めごとに解釈され、II.viii.51-59 までは全十戒の解釈を経て、総論を扱っている。特に、神への愛として知られる「第一の戒め」に対して、隣人への愛として知られる「第二の戒め」について扱われ、隣人を愛することは勧告ではなく、命令であるということが II.viii.56. では強調されている。その際、「復讐を願ってはならない。敵を愛せよ」⁶⁴ という戒めを単なる勧告としてしまい、それには従っても従わなくても良いとしてしまったスコラ主義者たちに、カルヴァンはここで批判を加えているのである。

つまりここでも、カルヴァンの矛先は、特定のスコラ神学者たちの、具体的な律法解釈に向けられているのであって、彼らの神学的方法論全体が批判されているのではない。

II.xvii.6:

「ところで、キリストは御自身のために功績を得たもうたかどうか、ということを問題にしている人たちがいる。(これはロンバルドゥス『命題集』第3巻18—やスコラ学者たちによってなされたとおりである。)」

(1559) “sibi ipse meruerit (quod faciunt Lombardus et scholastici) non minus stulta est...”

(1560) “si Iesus Christ a rien mérité pour soy, comme font le Maître des sentences et les scolastiques...”⁶⁵

II.xvii. は、キリストが「私たち（人間）のために」(nobis) 功績を得たということを扱っている。それに対して、キリストが「自分自身のため

に」(sibi ipse) 功績を得たかどうかを問題にする人がいるとして、ロンバルドゥスとスコラ主義者に言及している。

これに対してカルヴァンは、すべてをまとめておられる神のひとり子が、自分のために何かを得るということ自体が矛盾しているとしてこれを斥ける。つまりカルヴァンは、キリストの功績を「自分自身のため」であるかどうかという極めて具体的な問題について言及し、そのような教理を主張する特定のスコラ主義者たちを批判しているのである。

III.ii.1:

「いや、かれらの学派のうちで『信仰』について討論がなされるとき、神を単にその対象と呼ぶだけで終わっている。」

(1559) “*imo quum in scholis de fide disputant, Deum eius obiectum simpliciter vocando*”

(1560) “*mesmes quand on dispute de la foy aux escolles de Theologie, en disant cruement que dieu en est l'obiet...*”⁶⁶

この箇所ではカルヴァンは、「彼らの学派」(quum in scholis) と呼ばれるスコラ神学者たちの間では、神を単に信仰の対象と呼ぶだけで終わっていると批判している。それに対して、「神のつかわしたもうたイエス・キリストを知ること」(*ad Christum quaerendum incitemur*) が加えられなければならないとしている。

ここでカルヴァンは、スコラ神学者たちの信仰の理解では不十分であり、さらに付加されなければならない要素があることを指摘している。ここにおいても「信仰」という特定の神学的内容が扱われている。

III.ii.2:

「そういうわけであるから、この悪は、他の無数の悪と同じく [ソルボンヌの] スコラ神学者に帰すべきである。」

(1539) “*Quod malum, ut alia innumera, scholasticis sophistis acceptum referri par est: qui praeterquam quod caliginosa sua definitione*

totam vim eius deterunt”

(1559) “Ergo hoc malum, ut alia innumera, scholasticis acceptum referri par est...”

(1541) “Lequel mal, comme autres innumerables, se doit imputer aux Sophistes et Sorbonistes: lezquels, oultre ce qu'ilz amoyndrissent la vertu d'icelle par leur obscure et tenebreuse diffinition”

(1560) “Ce mal donc, comme d'autres infinis, doit estre imputé aux theologiens Sorboniques, lesquels ont couvert tant qu'ils ont peu Iesus Christ comme d'un voile.”⁶⁷

この箇所は、前節（III.ii.1.）に引き続き、「信仰」について、特に「含蓄的信仰（内包的信仰）」（*implicita fides*）を主張するスコラ神学者たちへの批判が展開されている。「含蓄的信仰」とは、何一つ理解せず、ただひたすら感覚を教会に明け渡すという形でなされる信仰である。この具体的な教理的内容を奉じるスコラ神学者に批判の矛先は向かっている。

III.ii.8:

「まず反駁しなければならないのは、[ソルボンヌの] 学校の中で流行を見ている『形相的信仰』と『非形相的信仰』との愚にもつかない区別である。」

(1559) “Ac primo refutanda est, quae in scholis volitat nugatoria fidei formatae et informis distinctio”

(1560) “En premier nous avons à refuter la distinction qui a eu toujours en vogue entre les Sorbonistes, touchant la foy qu'ils appellent Formée et Informée.”⁶⁸

中世の神学者たちによって、「形相的信仰」（*fides formata*）と「非形相的信仰」（*fides informis*）という区別がなされたことは良く知られている。前者は愛によって働き、恵みの状態なる信仰であり、後者は愛を欠き、恵みの状態の外に存在する信仰であり、知的に信じるだけの頭の問題とされている。

カルヴァンの批判は、この信仰の区別の問題という特定の教理に向けられている。スコラ神学者たちは、「同意」(assensus)に「敬虔な感情」(pia affectio)が添加物として加えられる時に「形相」(forma)を得て十分な信仰に到達すると考えるが、カルヴァンはむしろ、聖書が言う「信仰」とは、「同意」そのものにすでに「敬虔な感情」が含まれていると主張する。

このカルヴァンの立場を拒否している訳ではないが、カルヴァンから多大な影響を受けた改革派神学者の中には、スコラ神学者たちに似た「信仰」の区分を紹介しながら、救いに至る信仰を紹介する人物もいる。有名なのは、『ハイデルベルク信仰問答』の起草者の一人ザカリアス・ウルジヌスである。彼は『ハイデルベルク信仰問答注解』の中で、聖書の中には四種類の信仰が語られているとして、歴史的信仰、一時的信仰、奇跡の信仰、義とする信仰に触れている。ここでいう「歴史的信仰」は、⁶⁹単なる知的に信じるというレベルの信仰である。

III.ii.33:

「この点について、[ソルボンヌの]スコラ神学者どもは全面的にあやまっている。すなわち、かれらは『信仰』を考察するさい、これを知識による[神の言葉への]ただ単なる素朴な『同意』であるとし、これが『心からの信頼また確信』であるという面をないがしろにする。」

(1539/59) “In quo, tota terra, scholastici aberrant: qui in fidei consideratione nudum ac simplicem e notitia assensum arripiunt...”

(1541/60) “En laquelle chose les Theologiens Sorboniques faillent trop lourdement: qui pensent que la Foy soit un simple consentement à la parole de Dieu...”

III.ii.8. で扱った「信仰」における「知的同意」(notitia assensus)と「心からの信頼」(fides consideratio)の問題が、ここで再び持ち出されて批判されている。ここでも批判の矛先は、III.ii.8. 同様、この特定の教理に向けられていることは言うまでもない。

III.ii.38:

「ここから、あのスコラ学派の教義が、どんなに有害なものであるかを判断することは容易である。」

(1539/59) “Hinc iudicare licet quam perniciosum sit scholasticum illud dogma”

(1541/60) “De là peut-on iuger, combien la doctrine des theologiens Sophistes et pernicieuse: c'est que nous ne pouvons rien arrester en nous de la grace de Dieu...”⁷⁰

ここでは、救いや恩寵の確証をいかに持つかという問題が扱われている。ここでカルヴァンが「あのスコラ学派の教義が」(scholasticum illud dogma) と言っていることに注目すべきである。批判の対象が「教義」(dogma) であること、さらに「あの」(illud) という言葉でそれがいかに特定のものであって、スコラ主義全般ではないことを暗示している。

III.ii.41:

「なぜなら〔ソルボンヌの〕スコラ派の神学者が『愛は信仰と希望とに優先する』と説いているのは、全くの妄想にほかならないからである。」

(1539/59) “Quod enim tradunt Scholastici, charitatem fide ac spe priorem esse”

(1541/60) “Or ce que les sorboniques enseignent, que la charité précède la foi et l'esperance, n'est que pure rêverie.”⁷¹

ここでは信仰と愛の関係という特定の教理が扱われている。具体的には、ここでカルヴァンが名指ししている「スコラ神学者」は、愛が信仰と希望に優先しているとするが、カルヴァンはこれに対して、「われわれのうちに最初に愛を生み出すのは、信仰のみだ」(sola est fides quae in nobis caritatem primum generat.) と言って、信仰が愛に先立つとしている。

III.ii.43:

「その弟子は、気ちがいじみたおしゃべりどもの学校〔すなわち、ソルボンヌ派〕の中にいるのである。」

(1539/59) “O magistrum talibus dignum discipulis quales in insani-
bus rabularum scholis nactus est!”

(1541/60) “Mais un tel maistre est digne des disciples qu'il ha eu ez
escolles des Sophistes, c'est à dire Sorboniques.”

カルヴァンは、ここで「信仰」(fides)と「希望」(spes)の関係を論じ、両者が聖書においてはしばしば混同され、相互補完的に使われていると指摘している。カルヴァンはこの両者の関係を「希望とは信仰の糧食またその力にほかならない」(nihil aliud spem esse quam fidei alimentum et robur.⁷²)と説明している。

これに対して、ロンバルドゥスが『命題集』の中で展開している「希望の二重の基礎」(duplex spei fundamentum)と呼ばれる「神の恩寵」と「行ないの功績」に関する教説に、カルヴァンは批判を加えている。人間の功績によらず、神の恩寵にすぎることを「僭越」と呼ぶロンバルドゥスを批判し、この弟子たちが「気ちがいじみたおしゃべりどもの学校に」(in insanibus rabularum scholis)いると批判しているのである。

III.iv.1:

「今わたしはスコラ学派の詭弁家たちが『悔改め』について教えたことを検討する段階に来ているのだが、これはなるべく短く片づけたい。」

(1539/59) “Nunc venio ad excutienda ea quae de poenitentia scholastici sophistae tradiderunt”

(1541/60) “Je viens maintenant à discuter ce ques les Sophistes ont
enseigné de la Pénitance.”⁷³

ここでカルヴァンは、「悔い改め」の定義を検討する。まずここで「スコラ学派の詭弁家たち」と言われているのが、ロンバルドゥスとその支持者たちであることはその後の文章から明白である。ロンバルドゥスが

「悔い改め」を心の懺悔 (contritio)、口の告白 (confessio)、行ないによる償罪 (satisfactio) に分類・定義し、実際には人々に負担を負わせて苦しめ、形式的には無味乾燥な儀式に還元してしまったことを批判している。ここでの批判も、具体的な「悔い改め」の教理に向けられていることは明らかである。

III.iv.4:

『告解』に関しては、教会法学者とスコラ神学者との間につねに大きい論争があった。」

(1539/59) “*ingens fuit pugna inter Canonistas et Theologos scholasticos*”

(1541/60) “*Touchant la Confession: il y a tousjours eu grande contro-*
versie entre les Canonistes et les Theologiens scolastiques.”⁷⁴

ここでの批判は、「告解」を義務付けることに関して、スコラ神学者たちが持ち出した聖書の根拠とその引用の仕方に向けられている。カルヴァンによれば、彼らはマタイ 8:4、ルカ 5:14、17:14 などに見られるツァーラトの癒しの後、イエスが司祭に見せるように命じたという聖書の記述に、告解制度の根拠を持たせている。しかもこれに寓喩的解釈を施して、罪は霊的なツァーラトだとして、祭司が決められた宣言をすることが祭司の務めだと展開していると、カルヴァンは分析している。しかしここでイエスが命じたのは、告解制度を示唆しているのではなく、律法に定められた通りのことを命じたに過ぎないとカルヴァンは反論する。

ここでのカルヴァンのスコラ神学者たちへの批判は、この寓喩的解釈と告解制度を擁護する具体的な彼らの教説に対してである。

III.iv.26:

「しかも、それは、ひとりやふたりのことではなく、スコラ学派の全陣営をあげてなのである。」

(1539/59) “nec unus aut alter, sed universi scholastici. Nam ipsorum magister, postquam Christum...”

(1541/60) “non seulement un ou deux d'entre eux; mais toutes leurs Escoles? Car leur maistre après avoir confessé...”⁷⁵

この言葉だけを取り上げれば、カルヴァンはスコラ主義全体を批判していると取ることができる。しかし重要なのは、まずこれが「償罪」(satisfactio) についての議論であることは、III.iv.25. の文脈から明らかである。

カルヴァンが取り上げる問題の焦点は、罪の償いがキリストによって完全になされたにも関わらず、スコラ神学者たちが「バプテスマにおいていっさいの罪の一時的な刑罰は緩和される。けれども、バプテスマののちには、それは改悛によって軽減される」(quod in baptismo omnes peccatorum poenae temporales relaxantur, sed post baptismum, poenitentiae beneficio minorantur) とした点にある。

III.iv.38:

「このことばは、どのようにこじつけても、スコラ派の教義と一致させることができない。」

(1539/59) “cum dogmaticus tamen scholasticis conciliari nunquam poterunt”

(1541/60) “jamais ne se pourront accorder avec la doctrine des Scolastiques.”

III.iv.25. から「償罪」(satisfactio) についての議論が続く。ここではクリュソストモスとアウグスティヌスが引用されて、彼らの教理を、「スコラ派の教義」と一致させることはできないと言われている。つまり、教父たちの主張を盾にとって、スコラ派の主張する償罪の教理を正統化することはできないと、カルヴァンは主張しているのである。

ここにおいてもあくまで議論の焦点は、「償罪」という特定の教理であって、スコラ主義全般に関わる神学的方法論が問題なのではない。

III.xi.15:

「これよりもなおいくらか愚鈍なのは〔ソルボンヌの〕スコラ神学者たちであって、己れの先入見をここに混入するのである。…一般の教皇派の徒や〔ソルボンヌの〕スコラ神学者についていえば、かれらはこの点で二重のあざむきにおちいつている。…〔ソルボンヌ派の〕学校はつねにいよいよ悪い方にそれて行き、ついに破滅に突入して、一種のペラギウス主義に転落したのである。」

(1539) “His pravis dogmatibus orbem imbuerunt scholastici. Sed illi dupliciter falluntur...Scholae in deterius semper aberrarunt”

(1559) “*Crassius Paulo scholastici, qui praeparationes suas miscent...Quod ad vulgares papistas pertinet vel scholasticos, dupliciter hoc falluntur...Scholae in deterius semper aberrarunt*”

(1541) “Ce ont esté les Theologiens Sorboniques qui ont abreuvé le monde de ceste faulse opinion...mais ilz s'abusent doublement...Les escholes Sorboniques sont tousjours allées de mal en pis”

(1560) “*Les theologiens Sorboniques sont un peu plus lourds en meslant leurs preparations...Quant est des Sorboniques, ils s'abusent doublement...Les escoles Sorboniques sont toujours allées de mal en pis*...”⁷⁶

III.xi. では義認 (iustificatio) の問題が扱われる。ここで「二重のあざむき」(dupliciter hoc falluntur) と言われているのは、「信仰とは、功績に応じて神から報酬を期待する良心の確信であるとする点」と「神の恩寵は価なしの義の転嫁ではなく、聖く生きようとの努力に対する御霊の助けである」と解釈する点」⁷⁷を指している。

このような形でカルヴァンが「スコラ神学者たち」と言って念頭においているのは、第一義的にはロンバルドゥスである。カルヴァンは、ロンバルドゥスがアウグスティヌスの意見に従おうとしていたことは認めている。しかし結果的にアウグスティヌスからは逸れていき、ペラギウ

ス主義に転落したというのがカルヴァンの評価である。

ここでもカルヴァンのスコラ神学者たちへの批判は、義認に関する特定の教理的問題であり、彼らの神学的方法論全般が攻撃されているのではない。

III.xiv.11:

「すなわち、義認のはじめに関しては、われわれとスコラ神学者の比較的健全な人たち〔すなわち、ある程度 of 感覚と理性とをそなえている人たち〕との間には、争いは起こらない。」

(1543/59) “*iustificationis nihil inter nos et saniores scholasticos pugnae est*”

(1545/60) “*il n'y a nul débat entre nous et les docteurs scolastiques qui ont quelque sens et raison.*”⁷⁸

ここにおいてカルヴァンは、義認の教理の一部において、穏健な立場に立つスコラ神学者たちと同意があることを告白している。勿論この後の文脈においては、彼らとの教理の相違点が挙げられているが、少なくともスコラ神学者たちとの教理的な共通点が部分的に見出せることを指摘している点は特筆に価する。

III.xiv.12:

「スコラ派の〔ソルボンヌの〕神学者たちが、ここで言い抜けをしようと試みる遁辞は、かれらにとって何の足しにもならないものである。」

(1539/59) “*Quae ad evadendum, subterfugia quaerunt hic scholastici, eos non expediunt*”

(1541/60) “*Les subterfuges que cherchent icy les Sorbonistes pour evader, ne les despechent point.*”⁷⁹

ここで「遁辞（言い逃れ）」(subterfugia)と言われているのは、罪赦された後に犯した罪に対しては行ないによる償いが必要だ、と主張するスコラ神学者たちの主張を指している。彼らも恵みの重要性や救いにお

ける恵みの先行性は認めているが、その上で上記のような行いによる救いを巧妙に論じている点をカルヴァンは「遁辞」として批判しているのである。

ここでも問題とされているのは、スコラ神学者たち神学的方法論ではなく、義認に関わる具体的な教理の問題である。しかも、「スコラ神学者たち」という言葉は、フランス語訳では「ソルボンヌの人々」となっている。ここでカルヴァンが念頭においている「スコラ神学者たち」が、「ソルボンヌの神学者たち」に特定されていることが明らかである。

III.xiv.15:

「ここに問わねばならないのは、神の〔恐るべき〕法廷において、われわれが弁護としてどのような信頼をもつかであって、学校やどこかの片隅で、どういう作り話にふけることができるかではない。」

(1539/59) “Hoc, hoc quaerendum erat, quam ad eius tribunal defensionis fiduciam afferre, non quid in scholis et angulis fabulari possumus.”

(1541/60) “Or c'estoit ce qu'il falloit icy chercher: quelle fiance nous pourrions apporter, pour nous defendre en cest horrible iugement, et non pas ce qu'on en peut habiller ou mentir en quelque anglet d'une Sorbonne.”

ここでカルヴァンは、「学校やどこかの片隅で」と皮肉的な口調で言及しているが、フランス語訳を見ると、この「学校」という言葉でカルヴァンが「ソルボンヌ」を念頭に入っていたことが理解できる。

III.xvii.15:

「これは単に、スコラ神学者たちが、『行ないは人々の受けた恩寵によって価値を持つ』と説いていることだけを意味しているのではない。」

(1539/59) “Quo non tantum intelligimus quod tradunt Scholastici, a gratia acceptante habere opera suum valorem.”

(1541/60) “Par lesquelles parolles nous n'entendons pas seulement ce qu'enseignent les Scolastiques, c'est que les oeuvres ont leur valeur de la grace de Dieu qui les accepte.”⁸⁰

III.xvii.14. でカルヴァンは、聖書の中の信仰者が、自分の行ないを神のさばきに差し出して、自ら義を獲得するかのような聖句をどう解釈するかに言及している。カルヴァンはここに、神のさばきについて二重の構造があることを示唆している。⁸¹つまり、生活の全般に当て嵌まる神の包括的なさばきと、特定の問題を扱うさばきである。そしてこれらの聖句で扱われているのは、前者ではなく後者の問題であり、信仰者たちは神の完全性との関連で自分たちの義を主張しているのではなく、不敬虔で邪悪な人々との比較において自らの潔癖を主張しているとカルヴァンは解釈している。

この文脈の中で、スコラ主義者たちは、単に「行ないは人々の受けた恩寵によって価値を持つ」ということを解いているだけではなく、さらに「行ないは、もともと、律法の契約によって救いを獲得するに足りないが、しかし、神が受け入れたもうとき、これにふさわしい価値まで高められる」と言っていると言及されている。これに対してカルヴァンは、そもそも神の恩寵を受け、神に受け入れられたからと言って、行ないそのものがそれにふさわしい価値にまで高められるということ自体が間違っているとす。むしろ神が、「寛容をもって赦しを与え、価なしの義を人に授けたもうのでなければ、何の価値もない」と主張している。ここにおいて問題となっているのは、あくまで信仰者の行ないとそれに対する義の問題という特定の教理である。

III.xxiii.6:

「しかるに、[ソルボンヌの] スコラ神学者たちはこれに安住してしまい、まるで、これに反対することはあり得ないかのようである。」

(1539/59) “Scholastici vero in ea quiescunt, ac si nihil contra opponi posset.”

(1541/60) “Les Sorboniques s'y arrestent entierement, comme s'il n'y⁸² avoit que repliquer à l'encontre.”

ここでは予定の教理が扱われ、特に人間の将来の墮落を予見してある者を滅びの状態に創造したとする主張に言及して、「スコラ神学者たちはこれに安住してしまい、まるで、これに反対することはあり得ないかのようである」と言われている。焦点はあくまで、将来の予見に基づく予定という特定の教理にある。

IV.xiv.14:

「すなわち、詭弁家どもの諸学派においては、みごとに一致を示して、『新しい律法における聖礼典—すなわち、今日キリスト教会において行なわれている聖礼典—は、われわれが『死にあたる罪』によって障害を置かぬ限り、義とするものであり、恵みをもたらすものである』と教えている。」

(1539/59) “Magno enim consensu sophisticæ scholæ tradiderant, sacramenta novæ legis, hoc est, quæ nunc in usu sunt christianæ ecclesiæ, iustificare et conferre gratiam, modo non ponamus obicem peccati mortalis.”

(1541/60) “Car les escolles des Sophistes d'un commun consentement ont déterminé que les Sacremens de la nouvelle Loy, c'est à dire ceux desquels l'Eglise Chrestienne use maintenant, iustificient et conferent grace, si nous n'y mettons obiect ou empeschement de peché⁸³ mortel.”

ここでは聖礼典論が扱われる。カルヴァンは、一方でサクラメント (sacramentum) が単なる「しるし」や象徴であることに否定し (IV.xiv.13.)、他方でこれに神秘的な力があるとみなすことも否定している (IV.xiv.14.)。この後者の主張において、「詭弁家どもの諸学派においては、みごとに一致を示して」といるとカルヴァンは述べているのである。

IV.xiv.23:

「しかしながら、スコラ的な次の教義（これに関し、わたしはただ、ことのついでに触れるだけであるが）を、我々は徹底的に排斥しなければならない。すなわち、それは古き律法の聖礼典と、新しき律法の聖礼典との間に、いちじるしい相違を認め、まるで、前者は神の恵みを影で示したにほかならず、後者にいたって、恵みはありありと示された、とするのである。」

(1539/59) “Scholasticum autem illud dogma, ut hoc quoque obiter perstringam, quo tamen longum discrimen inter veteris ac novae legis sacramenta notatur, perinde ac si illa non aliud quam Dei gratiam adumbrarint, haec vero praesentem conferant, penitus explodendum est.”

(1541/60) “Au surplus ce que les Docteurs de l'escole mettent une grande difference entre les Sacremens de la vieille et nouvelle roy, comme si les premiers n'eussent que figuré en l'air la grace de Dieu, les seconds la donnoient presentement.”⁸⁴

ここでカルヴァンは、旧約の聖礼典と新約の聖礼典に本質的な相違を見出す立場を「スコラ的な教義」(scholasticum dogma)と称して否定している。むしろ、両者が本質的には同じものであること(IV.xiv.24.)、そして旧約の儀式が影と呼ばれたのは、それが不確実・不堅実だからではなく、その指し示しているものがキリストの現われの時まで保留されているからであること(IV.xiv.25.)、さらには新約と旧約の聖礼典の違いは、程度の差であること(IV.xiv.26.)が主張される。このように、旧約の聖礼典と新約の聖礼典の間に、本質的な違いを見出す特定の教理的立場を指して、「スコラ的教義」とカルヴァンは呼んでいるのである。

IV.xvii.13:

「スコラ神学者たちは、前述のような野蛮な不敬虔に恐れをなし、もう少し慎みのある言いかたをした。」

(1543/59) “Verecundius Scholastici, quos tam barbarae impietatis horror tenuit; nihil tamen ipsi quoque quam subtilioribus praestigiis ludunt.”

(1545/60) “Les Theologiens scolastiques ayans horreur d'une impiété si barbare parlent un peu plus sobrement, ou en parolles couvertes.”⁸⁵

IV.xvii. では聖餐論が扱われる。特に IV.xvii.12. でカルヴァンは、ローマ・カトリックが主張する「場所的現臨」(locali praesentia) を批判し、聖餐の恵みは肉体的な場所的現臨によってもたらされるのではなく、神の御霊によってもたらされることを主張する。

この「場所的現臨」を指して、「スコラ神学者たちは、前述のような野蛮な不敬虔に恐れをなし、もう少し慎みのある言いかたをした」と言われている。そして出てくるのがいわゆる実体変化説と呼ばれる立場である。つまりここで「スコラ神学者たち」と言われているのは、実体変化説を唱える特定の神学的立場の人々のことである。

IV.xvii.30:

「[ソルボンヌの] スコラ神学者たちの間で言い古されている区別がある。わたしはそれをここで述べることを恥とは思わない。それは、このように言う。『キリストは、いたるところにおいて、全きキリストでありたもうとはいえ、キリストのうちにあるいっさいが、いたるところにあるのではない』。わたしは、この[可哀そうな] スコラ神学者たち自身が、この命題の価値を正しく評価してくれればと思う。」

(1559) “Trita est in scholis distinctio, quam me refere non pudet: quamvis totus Christus ubique sit, non tamen totum quod in eo est, ubique esse. Atque utinam Scholastici ipsi vim huius sententiae probe expedissent.”

(1560) “Il y a une distinction vulgaire entre les theologiens Sorboniques, laquelle ie n'auray pas honte de reciter: c'est que Iesus Christ est par tout en son entier: mais que tout co qu'il a en soy,

n'est point par tout. Pleust à Dieu que les povres gens poisassent bien que vaut ceste senteneo.”⁸⁶

IV.xvii.16. 以降、カルヴァンはヨアキム・ヴェストファル (Joachim Westphal, 1510-74) に代表されるルター派の聖餐論を扱い、キリストの肉体的遍在を否定している。神性の特徴である遍在を、神性と人性の統一の故に、人性にも認める彼らの主張は、あたかも両性を鑄つぶして神でも人でもないわけのわからぬ中間的な存在にし、エウティケスやセルベトゥスのような一性一人格論へと陥る誤りであると、カルヴァンは指摘している。

そしてカルヴァンは、「スコラ神学者たち」(フランス語では「ソルボンヌの神学者たち」) の間で言い古されている「キリストは、いたるところにおいて、全きキリストでありたもうとはいえ、キリストのうちにあるいっさいが、いたるところにあるのではない」という区別自体は的を射ていると評価しつつ、スコラ神学者たち自身がこれを正しく評価して欲しいと皮肉的に述べて、彼らの肉体的現臨を批判している。ここでの焦点は、キリストの遍在と二性一人格論の問題、特に一人格の内に統一された神性と人性というふたつの性質が、その固有性を失うことなくに統一を保つかという、極めて特定の教理的内容にあることは言うまでもない。

IV.xviii.1:

「スコラ神学者の中でも[後継者たちと比べて]かなりましな人たちが、まじめに、どういうふうにこの教義を受け入れたかについて、わたしは何らかかざらうことをしない。」

(1539/59) “Quomodo initio dogma istud acceperint saniores Scholastici, nihil moror.”

(1560) “Il ne me chaut en quel sens ceste opinion a esté prinse du commencement, et comment elle a été traitée des docteurs Scolastiques, qui ont parlé un peu plus passablement que leurs succes-

seurs qui sont venus depuis.”

ここではローマ・カトリックのミサの教理が扱われる。特に、ここで言われている「この教義」(dogma istud)とは、ミサが罪の赦しを得るための犠牲(expiatoria)であり、供え物(victima)であるという教理を指している。ここで「スコラ主義者」とは、ミサの犠牲的要素という具体的な教理を受け入れる信奉者を指している。

IV.xix.15:

「ところが、ローマ主義者やスコラ主義者らは(すべてのことがらについてよこしまな解釈をくだして、腐敗させるのをつねとするやからであるが)ここにひとつの『聖礼典』を見いだそうとして苦慮するのである。」

(1543/59) “Romanenses autem et Scholastici, quibus solenne est omnia perperam interpretando corrumpere, anxie in reperiendo hic sacramento desudant.”

(1545/60) “Or les Theologiens Romanistes, qui ont cette bonne coutume de corrompre et de dépraver tout par leurs belles gloses, se tourmentent fort à y trouver un Sacrement.”

IV.xix. はプロテスタントが拒否した、ローマ・カトリックの五つのサクラメントを扱い、IV.xix.14. からは、その内の一つである「悔悛」(poenitentia) が扱われている。これを聖礼典と見なそうとする特定の立場の人々を指して、カルヴァンは「ローマ主義者やスコラ主義者ら」と言っている。

注

- 1 William J. Bouwsma, *John Calvin: A Sixteenth-Century Portrait* (New York: Oxford University Press, 1988) ; idem, “The Quest for the Historical Calvin,” *Archiv für Reformationsgeschichte* 77 (1986) : 47-57,

esp. 55; Alister E. McGrath, *A Life of Calvin: A Study in the Shaping of Western Culture* (Oxford, U.K. and Cambridge, Mass.: Blackwell, 1990), 148; idem, "Humanist Elements in the Early Reformed Doctrine of Justification," *Archiv für Reformationsgeschichte* 73 (1982) : 5–20, esp. 19. Cf. Alexander Ganoczy, *The Young Calvin*, trans. David Foxgrover and Wade Provo (Philadelphia: Westminster Press, 1987), 181; H. R. Trover-Roper, *Religion, the Reformation and Social Change and Other Essays* (London: Macmillan, 1967), 25. カルヴァンとエラスムスの修辞学的比較研究については、Masami Inoue, *The Philosophia Christi and Mens Scriptoris: A Comparative Study of the Hermeneutics and Humanism of Desiderius Erasmus and John Calvin* (Th.M. thesis: Calvin Theological Seminary, 1990) を参照。

- 2 Donald Sinnema, "The Distinction Between Scholastic and Popular: Andreas Hyperius and Reformed Scholasticism," in *Protestant Scholasticism: Essays in Reassessment*, eds. Carl R. Trueman and R. S. Clark (London: Paternoster Press, 1999), 127–143, esp. 127; idem, "Reformed Scholasticism and the Synod of Dort (1618–19) " in *John Calvin's Institutes: His Opus Magnum*, ed. Van der Walt (Potchefstroom: Potchefstroom University, 1986), 467–506, esp. 469–72. Cf. *Oxford Latin Dictionary*, s.v. "Scholasticus."
- 3 Richard A. Muller, *Post-Reformation Reformed Dogmatics: The Rise and Development of Reformed Orthodoxy, ca. 1520 to ca. 1725*, 4 vols. (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2003), I:33–37; idem, "Scholasticism and Orthodoxy in the Reformed Tradition: Definition and Method," in *After Calvin: Studies in the Development of a Theological Tradition* (Oxford: Oxford University Press, 2003), 25–46.
- 4 Willem J. van Asselt and Eef Dekker, "Scholasticism, Medieval," in Trevor A. Hart, ed., *The Dictionary of Historical Theology* (Cumbria, UK: Paternoster; Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000), 509–12, esp.

- 509: "The term 'Medieval Scholasticism' primarily refers to a method for education and research which was developed in the medieval period." ; Willem J. van Asselt, "Scholasticism, Protestant," in Hart, ed., *The Dictionary of Historical Theology*, 512–15, esp. 512: "Modern research interprets Protestant Scholasticism as a methodological approach, rather than a certain type of content."
- 5 Cf. Beryl Smalley, *The Study of the Bible in the Middle Ages* (Notre Dame, IN.: University of Notre Dame Press, 1964), 26–36; Gillian R. Evans, *The Language and Logic of the Bible: The Earlier Middle Ages* (Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1984), 8–10, 51–122; Yve Congar, *A History of Theology*, ed. and trans. Hunter Guthrie (Garden City, NY.: Doubleday, 1968), 50–68; Norman Kretzmann, Anthony Kenny, and Jan Pinborg, eds., *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy: From the Rediscovery of Aristotle to the Disintegration of Scholasticism 1100-1600* (Cambridge, UK.: Cambridge University Press, 1982; repr, 2003), 19–21.
 - 6 John Marenbon, *Medieval Philosophy: An Historical and Philosophical Introduction* (London and New York: Routledge, 2007), 215–18; Kretzmann, al. eds., *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, 21–29.
 - 7 Cf. Christopher Schabel, *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Thirteenth Century* (Leiden: Brill Academic, 2006) ; idem, *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Fourteenth Century* (Leiden: Brill Academic, 2007).
 - 8 Kretzmann, al. eds., *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, 30–33; Brian Lawn, *The Rise and Decline of the Scholastic "Quaestio disputata": With Special Emphasis on Its Use in the Teaching of Medicine and Science* (Leiden: E.J. Brill, 1993) ; Cf. John Schneider, *Philip Melancthon's Rhetorical Construal of Biblical Authority* (Lewiston: Edwin

- Mellen, 1990), 73-75; Willem van't Spijker, *Principe, methode en functie van de theologie bij Andreas Hyperius* (Kampen: J.H. Kok, 1990) ; Ian McPhee, "Conservator or Transformer of Calvin's Theology? A Study of the Origins and Development of Theolodre Beza's Thought, 1550-1570" (Ph.D. diss.: Cambridge University, 1979), xv-xviii; William T. Costello, *The Scholastic Curriculum at Early Seventeenth-Century Cambridge* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958), 14-35; Stephen Robert Spencer, "Reformed Scholasticism in Medieval Perspective: Thomas Aquinas and Francois Turretini on Incarnation" (Ph.D. diss.: Michigan State University, 1988), 88-95.
- 9 Smalley, *The Study of the Bible in the Middle Ages*, 72; M.-D. Chenu, *Nature, Man, and Society in the Twelfth Century: Essays on New Theological Perspectives in the Latin West*, trans. Jerome Taylor and Lester L. Little (Chicago: University of Chicago Press, 1968), 291.
- 10 Richard A. Muller, *Dictionary of Latin and Greek Theological Terms: Drawn Principally from Protestant Scholastic Theology* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 1985), s.v. "Bene docet, qui bene distinguit," 57.
- 11 カルヴァンは、様々な所で中世のスコラ的区別を肯定的な形で用いている例が指摘されている。例えばムラーは、アンセルムスの贖罪論的充足説に対するジョン・ドゥンス・スコトゥスの批判に触れ、カルヴァンがスコトゥスの批判を継承していると指摘しているし、出エジプト記 3:14 やイザヤ 28:22 の解釈において、中世スコラ主義の *necessitas consequentiae* と *necessitas consequentis* (*necessitas absoluta*) の区別や、*opus proprium* と *opus alienum* の区別を採用していると指摘している。Cf. Muller, "Scholasticism in Calvin," 52-56.
- 12 John Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.4; II.ii.6; II.ii.16; II.ii.26; II.ii.27; II.viii.56; II.xvii.6; III.ii.1; III.ii.2; III.ii.8; III.ii.33; III.ii.38; III.ii.41; III.ii.43; III.iv.1; III.iv.4; III.iv.26; III.iv.38; III.xi.15; III.xiv.11; III.

xiv.12; III.xiv.15; III.xvii.15; III.xxiii.6; IV.xiv.14; IV.xiv.23; IV.xvii.13; IV.xvii.30; IV.xviii.1; IV.xix.15. 一五三九年版ラテン語テキストは、*Ioannis Calvini opera quae supersunt omnia*, 59 vols. eds. G. Baum, E. Cunitz, and E. Reuss (Brunswick: Schwetschke, 1863-1900), vol. 1, col. 253-1152 (以下 *CO* と略記). 一五五九年版ラテン語テキストは、*CO*, vol. 2. そして一五六〇年版フランス語テキスト *Institution de la Religion Chretienne* は、*CO*, vol. 3-4 にそれぞれ所収。Cf. Richard A. Muller, “Scholasticism in Calvin: A Question of Relation and Disjunction,” in *The Unaccommodated Calvin: Studies in the Foundation of Theological Tradition* (Oxford: Oxford University Press, 2000), 39-61, esp. 50-52, 58-61. ムラーの分析では、“scholastici” は全部で二六回 (“quae in scholis” = “Sorbonistes” を含むと二七回) 使われているとされているが、彼が論文の最後に付した一覧表で数えても二四回になると思われる。

13 ムラーの分析では、全二七回の内 “scolastiques” と訳されている例は一五回、残りの一二回の内、一回が “theologiens romanisques”、二回が “Sophistes”、残りの九回が “theologiens Sorbonniques” と言われている。Cf. Muller, “Scholasticism in Calvin,” 50.

14 ムラーは「スコラ主義者の比較的健全な人たち」(saniores scholastici) という用例を指して、“scholastici” という語が全面的に否定的な訳ではないと言う。しかし II.ii.6. でカルヴァンは「このふたつの点、ことのついでに注意しておきたかったのは、読者がスコラ神学者のうちの比較的健全な人たちと比べても、わたしがどんなに相違しているかを見ておかれるためだったのである」と述べて、あくまで内容的には否定的に捉えていることも指摘しておく必要がある。

15 Muller, “Scholasticism in Calvin,” 50-52.

16 一五五九年ラテン語版にある “scholastici” の語と、一五六〇年フランス語版にある “scolastiques” の語は、それぞれ一五三九年ラテン語版と一五四一年フランス語版には存在しない。Cf. Lombard, *Sententi-*

ae, II.25.8.

- 17 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.12, in *CO*, vol. 2, col. 196: “partim debilitate, partim vitiate fuit, ut deformes ruinae apparent.”
- 18 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.13, in *CO*, vol. 2, col. 197.
- 19 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.16, in *CO*, vol. 2, col. 199: “totam istam, et intelligendi vim, et intelligentiam quae inde consequitur, rem esse fluxam et evanidam coram Deo, ubi non subest solidum veritatis fundamentum.”
- 20 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.16, in *CO*, vol. 2, col. 199: “ut gratuita homini dona post lapsum detracta esse, ita naturalia haec quae restabant, corrupta fuisse docet.” Cf. Augustine, *De natura et gratia*, III.3. 邦訳は、金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集9ペラギウス派駁論集(1)』(教文館、一九七九年), 127-246, esp. 130-31.
- 21 Cf. Aquinas, *Summa theologiae*, I.83.3.
- 22 Wulfert de Greef, *The Writings of John Calvin*, trans. Lyle D. Bierma (Grand Rapids, MI.: Baker Book House, 1993), 112; Cf. T. H. L. Parker, “Dating the Sermons 1 and 2 Timothy and Job,” in his *Calvin's Preaching* (Louisville, KY.: Westminster/John Knox Press, 1992), 163-171.
- 23 Calvin, *Sermons sur le Livre de Iob*, in *CO*, 34, col. 339-340: “Et de fait, quand ces docteurs Sorboniques dissent, que Dieu a une puissance absolue, c'est un blasphème diabolique qui a esté forgé aux enfers.”
- 24 Calvin, *Sermons sur le Livre de Iob*, in *CO*, 34, col. 336: “Or en cela Iob blasphème Dieu: car combien que la puissance de Dieu soit infinie, si est-ce que de la faire ainsi absolue, c'est imaginer en luy une tyrannie, et cela est du tout contraire à sa maiesté, car nostre Seigneur ne veut point estre puissant qu'il ne soit iuste: et ce sont cho-

- ses inseparables, que sa iustice et sa puissance.” Cf. Muller, *Dictionary of Latin and Greek Theological Terms*, s.v. “potentia absoluta,” 231.
- 25 Cf. David C. Steinmez, “Calvin and the Absolute Power of God,” *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, vol. 18, no. 1 (Spring, 1988) : 65–79 and also in his *Calvin in Context* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1995), 40–52; idem, “The Scholastic Calvin,” in *Protestant Scholasticism: Essays in Reassessment*, eds. Carl R. Trueman and R. Scott Clark (Cumbria, U.K.: Paternoster, 1999), 16–30, esp. 20; Muller, “Scholasticism in Calvin,” 47.
- 26 John Calvin, *Praelectiones in Duodecim Prophetas Minores*, in *CO*, vol. 42, col. 185–88: “Nam quum ingenti negotiorum mole oppressus, vix plerumque semihorae spatio meditatatas lectiones domo afferre cogeretur, auditorum aedificationi et commodis maluit, vero sensu eliciendo et planuum faciendo, consulere, quam inani verborum pompa quum ipsorum aures pascere, tum ostentationi et gloriae suae studere. Quanquam haud etiam negare ausim hanc lectionum legem esse, ut in his scholastico potius quam oratorio more disseratur.” Cf. Parker, *Calvin's Preaching*, 132; Muller, “Scholasticism in Calvin,” 42–43.
- 27 John Calvin, “L'ordre des escoles de Geneve. La publication des loix concernans l'ordre des Escoles de la dite cité en la presence de nos Magnifiques et treshonnorez Seigneurs, Syndiques et Conseil,” in Petrus Barth, et al. eds., *Johannis Calvini Opera Selecta* (Munich, 1926–52), II:364–385. 邦訳は、出村彰訳「ジュネーヴ学院規定」『世界教育寶典 IV ルター・ツウィングリ・カルヴァン』（玉川大学出版部、昭和四四年），487–519. Cf. Muller, “Scholasticism in Calvin,” 43.
- 28 Cf. *Leges Academiae Genevensis* (Geneva: Stephanus, 1559; facsimile repr. Geneva: J. G. Fick, 1859), fol. a.iii, recto–.ii, recto; *Le Livre du recteur de l'Académie de Genève*, ed. S. Stelling-Michaud, 6 vols. (Ge-

neva: Droz, 1959-80), I:64-65; Gillian Lewis, "The Geneva Academy," in *Calvinism in Europe, 1540-1620*, eds. Andrew Pettegree, Alastair Duke, and Gillian Lewis (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 35-63, esp. 39-40. Cf. Muller, "Scholasticism in Calvin," 43-44.

29 Calvin, *Commentarius in Epistolam Pauli ad Romanos*, in *CO*, vol. 49, col. 60: "Nunc vides ut iustitia fidei iustitia Christi sit. Ut ergo iustificemur, causa efficiens est misericordia Dei: Christus, materia: verbum cum fide, instrumentum. Quare fides iustificare dicitur: quia instrumentum est recipiendi Christi, in quo nobis communicator iustitia." 邦訳は渡辺信夫訳『カルヴァン新約聖書註解 VII ローマ書』（新教出版社、一九五九），93-94.

30 Calvin, *Commentarius in Epistolam ad Ephesios*, in *CO*, vol. 51, col. 147: "Hic fundamentum et primam causam tam vocationis nostrae quam bonorum omnium, quae a Deo percipimus, facit aeternam eius electionem." 邦訳は森井真訳『カルヴァン新約聖書註解 X ガラテヤ・エペソ書』（新教出版社、一九六二），159.

31 Calvin, *Commentarius in Epistolam ad Ephesios*, in *CO*, vol. 51, col. 148: "In hoc membro tres salutis nostrae causas exprimit: quartam paulo post subnectet. Causa efficiens est beneplacitum voluntatis Dei: causa materialis est Christus: causa finalis, laus gratiae." 森井真訳『カルヴァン新約聖書註解 X ガラテヤ・エペソ書』, 161.

32 Calvin, *Commentarius in Epistolam ad Ephesios*, in *CO*, vol. 51, col. 150: "Tam ad causam formalem descendit, nempe ad evangelii praedicationem, per quam in nos exundat Dei bonitas. 森井真訳『カルヴァン新約聖書註解 X ガラテヤ・エペソ書』, 163.

33 Cf. Marenbon, *Medieval Philosophy*, 10-11; Jonathan Barnes, "Metaphysics," in *Cambridge Companion to Aristotle* (Cambridge, UK.: Cambridge University Press, 1995), 66-108.

- 34 Calvin, *Primus Mosis Liber Genesis vulgo dictus*, in *Commentarii in quinque libros Mosis*, CO, vol. 23, col. 15: "Sit igitur haec prima sententia, mundum non esse aeternum, sed creatum a Deo fuisse."
- 35 Steinmetz, "The Scholastic Calvin," 23: "The Aristotle whom Christian scholastics adopted was an Aristotle who had been baptized, chastened and corrected by Christian theology, and shorn of his most incorrigibly pagan convictions."
- 36 Cf. Jacob Burckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien* (Basel: Schwieghauser, 1860) ; Charles G. Nauert, Jr., "The Clash of Humanists and Scholastics: An Approach to Pre-Reformation Controversies," *Sixteenth Century Journal*, vol. 4, no. 1 (April, 1973) : 1-18.
- 37 Quirinus Breen, *John Calvin: A Study in French Humanism* (Grand Rapids, MI.: Eerdmans, 1931) ; idem, "John Calvin and the Rhetorical Tradition," *Church History*, vol. 26 (1957) : 3-21 and in *Christianity and Humanism: Studies in the History of Ideas* (Grand Rapids, MI.: Eerdmans, 1968), 107-129; Roy W. Battenhouse, "The Doctrine of Man in Calvin and in Renaissance Platonism," *Journal of the History of Ideas*, vol. 9 (1948) : 447-71; Robert D. Linder, "Calvinism and Humanism: The First Generation," *Church History*, vol. 44, no. 2 (June, 1975) : 167-81; Charles Trinkaus, "Renaissance Problems in Calvin's Theology," *Studies in the Renaissance*, vol. 1 (1954) : 59-80; François Wendel, *Calvin et l'Humanisme* (Paris: Presses Universitaires de France, 1976) ; E. David Willis, "Rhetoric and Responsibility in Calvin's Theology" in Alexander J. McKelway and E. David Willis, eds., *The Context of Contemporary Theology* (Atlanta: John Knox Press, 1974), 43-63; Ganoczy, *The Young Calvin*, 178-181; Bouwsma, *John Calvin*, 113-127; Alister E. McGrath, *The Intellectual Origins of the European Reformation* (Oxford, UK and Cambridge, USA: Blackwell, 1987; repr., 1994), 43-59.

- 38 Cf. Erika Rummel, *The Humanist-Scholastic Debate in the Renaissance and Reformation* (Cambridge, MA and London, UK.: Harvard University Press, 1995).
- 39 James Overfield, *Humanism and Scholasticism in Late Medieval Germany* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1984) ; idem, "Scholastic Opposition to Humanism in Pre-Reformation Germany" *Viator*, vol. 7 (1976) : 391-420; Paul Oskar Kristeller, *Medieval Aspects of Renaissance Learning: Three essays*, ed. and trans. E. P. Mahoney (Durham, N.C.: Duke University Press, 1974). Cf. idem, *Renaissance Thought: The Classic, Scholastic, and Humanistic Strains* (New York: Harper, 1961) ; idem, *Philosophy and Humanism: Renaissance Essays in Honor of Paul Oskar Kristeller*, ed. Edward P. Mahoney (New York: Columbia University Press, 1976). Cf. Steven Ozment, "Humanism, Scholasticism, and the Intellectual Origins of the Reformation," in F. Forrester Church and Timothy George, eds., *Continuity and Discontinuity in Church History: Essays Presented to George Huntston Williams* (Leiden: E.J. Brill, 1969), 133-149 ; Lewis W. Spitz, "The Course of German Humanism," in Heiko A. Oberman and Thomas A. Brady, Jr., *Itinerarium Italicum: The Profile of the Italian Renaissance in the Mirror of Its European Transformation* (Leiden: E.J. Brill, 1975).
- 40 Kristeller, *Renaissance Thought*, 8-23, esp. 10.
- 41 Charles Trinkaus, *In Our Image and Likeness: Humanity and Divinity in Italian Humanist Thought*, 2 vols. (Chicago: University of Chicago Press, 1970), XIV-XV; Brian Gerrish, *Grace and Reason* (Chicago: University of Chicago Press, 1962; repr., 1979), 153; cf. Charles Pardee, *Calvin and Classical Philosophy* (Leiden: E. J. Brill, 1977).
- 42 Linder, "Calvinism and Humanism," 168-69.
- 43 William J. Bauwsma, "Two Faces of Humanism: Stoicism and Augustinianism in Renaissance Thought," in Heiko A. Oberman and

- Thomas A. Brady, Jr., eds., *Itinerarium Italicum: The Profile of the Italian Renaissance in the Mirror of Its European Transformation* (Leiden: E. J. Brill, 1975), 3-4, 52; Alain Dufour, "Humanisme et Reformation: État de la question," in *Histoire politique et psychologie historique* (Genève: Droz, 1966), 38.
- 44 Ozment, "Humanism, Scholasticism, and the Intellectual Origins of the Reformation," 137-39.
- 45 ヒューマニズムに関しては、Kristeller, *Renaissance Thought*, 22, 92-119; idem, "Humanism," in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, eds. Charles B. Schmitt and Quentin Skinner (Cambridge, UK.: Cambridge University Press, 1988), 113-37; Lisa Jardine, "Humanistic Logic," in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, 173-98; Charles B. Schmitt, *Aristotle and the Renaissance* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1983). スコラ主義に関しては、Muller, *Post-Reformation Reformed Dogmatics*, I:34-37; Willem J. van Asselt, "Protestantse scholastiek. Methodologische kwesties bij de bestudering van haar ontwikkeling," in *Tijdschrift voor Nederlandse Kerkgeschiedenis*, vol. 4, no. 3 (Sept. 2001) : 64-69; Armand Maurer, *Medieval Philosophy* (New York: Random House, 1962) ; David Knowles, *The Evolution of Medieval Thought* (New York: Vintage Books, 1962), 87; J. A. Weisheipl, "Scholastic Method," in *New Catholic Encyclopedia*, vol. 12, 1145-46; G. Fritz and A. Michel, "Scholas-tique," in *Dictionnaire de théologie catholique*, vol. 14/2, cols. 1691-1728; Calvin G. Normore, s.v., "Scholasticism," in R. Audi, ed., *The Cambridge Dictionary of Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), 716-717.
- 46 Spitz, "The Course of German Humanism," 375-376; Kristeller, *Renaissance Thought*, 113-114, 116; Overfield, "Scholastic Opposition to Humanism in Pre-Reformation Germany," 391-420; Ozment, "Hu-

manism, Scholasticism, and the Intellectual Origins of the Reformation,” 137.

47 Frank A. James III, “Peter Martyr Vermigli: At the Crossroads of Late Medieval Scholasticism, Christian Humanism and Resurgent Augustinianism,” in *Protestant Scholasticism: Essays in Reassessment*, eds., Carl R. Trueman and R. S. Clark (Cumbria, UK: Paternoster, 1999), 62–78; cf. John Patrick Donnelly, *Calvinism and Scholasticism in Vermigli's Doctrine of Man and Grace* (Leiden: E. J. Brill, 1975) ; idem, “Calvinist Thomism,” *Viator* 7 (1976) : 441–55; idem, “Italian Influences on the Development of Calvinist Scholasticism,” *The Sixteenth Century Journal*, vol. 7, no. 1 (1976) : 81–101; Marvin Anderson, “Peter Martyr Vermigli: Protestant Humanist,” in *Peter Martyr Vermigli and Italian Reform*, ed., Joseph C. McLelland (Waterloo: Wilfrid Laurier University Press, 1980), 65–151; idem, “Peter Martyr, Reformed Theologian (1542–1562),” *The Sixteenth Century Journal*, vol. 4 (1973) : 41–64.

48 Richard A. Muller, *The Unaccommodated Calvin: Studies in the Foundation of Theological Tradition* (Oxford: Oxford University Press, 2000), 75.

49 この資料は、Richard A. Muller, “Scholasticism in Calvin: A Question of Relation and Disjunction,” in his *The Unaccommodated Calvin: Studies in the Foundation of a Theological Tradition* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2000), 58–60. に収録された表に多くを負っている。但し、そこに幾つか欠落した引用と、邦訳、そして独自のコメントを付加した。

50 Cf. Lomabrd, *Sententia*, II.24.5; Aquinas, *Summa theologiae*, I.83.3; cf. La Valle, “Calvin’s Criticism of Scholastic Theology,” 267–69.

51 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.4: “donec eo ventum est ut vulgo putaretur, homo sensuali tantum parte corruptus, habere

- prorsus incolumem rationem, voluntatem etiam maiori ex parte.”
- 52 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.4: “Nec ab eo variat Augustinus, quum docet facultatem esse rationis et voluntatis, qua bonum eligitur gratia assistente, malum, ea desistente.”
- 53 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.4: “Sua tamen et ipsi afferung, sive quae meliora esse, sive quae facere putabant ad maiorem explicationem.”
- 54 Muller の表では、欠落している一節だが、“autem in scholis” (escoles de Theologie) という語が使われているので、挙げておく。
- 55 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.5, *CO*, vol. 2, col. 190: “Hanc distinctionem ego libenter recipio, nisi quod illic necessitas cum coactione perperam confunditur.” ; idem, *Institution de la religion Chretienne 1560*, II.ii.5, in *CO*, vol. 3, col. 304: “ils confessant que les deux autres sont perdues par le peché. Je reçois volontiers ceste distinction, sinon qu’en icelle la nécessité est mal confondue avec contrainte.”
- 56 一五五九年ラテン語版にある “scholastici” の語と、一五六〇年フランス語版にある “scolastiques” の語は、それぞれ一五三九年ラテン語版と一五四一年フランス語版には存在しない。Cf. Lombard, *Sententiae*, II.25.8.
- 57 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.12, in *CO*, vol. 2, col. 196: “partim debilitate, partim vitiate fuit, ut deformes ruinae apparent.”
- 58 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.13, in *CO*, vol. 2, col. 197.
- 59 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.16, in *CO*, vol. 2, col. 199: “totam istam, et intelligendi vim, et intelligentiam quae inde consequitur, rem esse fluxam et evanidam coram Deo, ubi non subest solidum veritatis fundamentum.”
- 60 Calvin, *Institutio christianae religionis*, II.ii.16, in *CO*, vol. 2, col. 199:

“ut gratuita homini dona post lapsum detracta esse, ita naturalia haec quae restabant, corrupta fuisse docet.” Cf. Augustine, *De natura et gratia*, III.3. 邦訳は、金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集 9 ペラギウス派駁論集 (1)』(教文館、一九七九年), 127-246, esp. 130-31.

61 Cf. Aquinas, *Summa theologiae*, I.83.3.

62 Lombard, *Sententiae*, II.24.5; Aquinas, *Summa Theologiae*, II/1.109.1-2; Duns Scotus, *In Sent.*, I.17.2.2, I.17.3.19.

63 Aquinas, *Summa Theologiae*, II/1.108.4, II/2.184-186.

64 Cf. レビ 19:18、ルカ 6:27、マタイ 5:44 など。

65 これは一五五九年ラテン語版に付加された文章で、一五三九年ラテン語版、一五四一年フランス語版には該当する文章がない。Cf. Lombard, *Sententiae*, III.18; Bonaventure, *In Sent.*, III.8; Aquinas, *Summa theologiae*, III.59.3.

66 一五三九年ラテン語版、一五四一年フランス語版には存在しない。

67 一五三九年ラテン語版にある “sophistis” という語が、一五五九年ラテン語版では削除されている。一五四一年版にある “Sophistes” という語は削除され、“aux Sophistes et Sorbonistes” が “aux theologiis Sorboniques” に変えられている。

68 「ソルボンヌの学校の中で」(in scholis/entre les Sorbonistes) という句は、一五五九年ラテン語版と一五六〇年フランス語版のみに用いられているが、「形相的信仰」と「非形相的信仰」の区別に関する議論は、一五三九年ラテン語版と一五四一年フランス語版にも見られる。Cf. (1539) “qui praeterquam quod calignosa sua definitione totam vim eius deterunt: dum nugatorium fidei formatae et informis definitionem totam eius deterunt” ; (1541) “lezquelz, outre ce qu’ilz amoyndrissent la vertu d’icelle par leur obscure et tenebreuse diffinition, en adjoustant je ne scay quelle distinction frivole de la foy formée et informe...” Cf. Lombard, *Sententiae*, III.23.4; Aquinas, *Summa theologiae*, II/2.4.3.

- 69 Zacharias Ursinus, *The Commentary of Dr. Zacharias Ursinus on the Heidelberg Catechism*, trans. G. W. Williard (Phillipsburg, NJ.: Presbyterian and Reformed Publishing, 1852), 108-112. 因みに、このウルジヌスの注解は、スコラ的な方法論で論じられていると評価されるものである。
- 70 Cf. Bonaventure, *In Sent.*, IV.20.1; Aquinas, *Summa theologiae*, II/1.112.5.
- 71 Cf. Lombard, *Sententiae*, III.23.9, III.25.5; Bonaventure, *In Sent.*, III.36.6.
- 72 “robur” には、「力」の他に、「中心部、精髓、重要点」などの意味もある。Cf. 田中秀央編『羅和辞典 増補改訂版』（研究社、一九六六年），s.v. “robur,” 545.
- 73 Cf. Lombard, *Sententiae*, IV.14.1.
- 74 Cf. Lombard, *Sententiae*, IV.17.1-4; Aquinas, *Summa theologiae*, III, suppl., 6.2-3; Biel, *Collectorium*, IV.17.1.1.
- 75 Cf. Lombard, *Sententiae*, III.19.4; Aquinas, *Summa theologiae*, III.83.4.
- 76 Cf. Aquinas, *Summa theologiae*, II/1.112.3; Bonaventure, *In Sent.*, I.41.1.2.
- 77 Calvin, *Institutio christianae religionis*, III.xi.15, in *CO*, vol. 2, col. 546: “et quod fidem appellant conscientiae certitudinem, in exspectanda a Deo pro meritis mercede, et quod gratiam Dei non gratuita iustitiae imputationem, sed spiritum ad studium sanctitatis adiuvantem interpretantur.”
- 78 この文章は、一五三九年ラテン語版ならびに一五四一年フランス語版には存在せず、一五四三年ラテン語版において初めて加えられた文章である。Cf. Aquinas, *Summa theologiae*, II/1.113.1.
- 79 Cf. Biel, *Collectorium*, II.27.1.2; Aquinas, *Summa theologiae*, III.suppl., 25.1.
- 80 Duns Scotus, *In Sent.*, I.17.3; Occam, *In Sent.*, I.17.1.

- 81 III.xvii.14. で挙げているのは、詩篇 7:8、17:1・3、18:20-23、26:4、10ff、
I サムエル 26:23、II コリント 1:12、I コリント 4:4。III.xvii.15. で挙げ
ているのは、箴言 20:7、12:28、エゼキエル 18:9・21、33:15 である。
- 82 Lombard, *Sententiae*, I.40.4.
- 83 この内容についての言及は、一五三六年ラテン語初版においてすで
に見られる。Calvin, *Institutio christianae religionis*, (1536), cap.5:
“Verum, quoniam illa de septem sacramentis opinion omnium fere
sermone trita, scholasque et conciones omnes pervagata, vetustate
ipsa radices egit ac hominum animis etiamnum insidet.” 邦訳は、久
米あつみ訳『キリスト教綱要（一五三六年版）』（教文館、二〇〇〇年）、
213. 「しかし、この七つのサクラメントという考えはほとんどすべて
の人の話では常套句となり、学校やすべての集りの常識になっていて、
その古さをもって根をおろし、いまだに人間の心に住みついているの
である。」
- 84 Cf. Lombard, *Sententiae*, IV.1.1; Aquinas, *Summa theologiae*, III.62.6,
II/1.101.2.
- 85 この箇所は、一五三九年ラテン語版、一五四一年フランス語版には
見られない。因みに、ここで言われている「スコラ主義者たち」は、
前節（IV.xvii.12.）に出てくる「エゴ・ベレンガリウス」（Ego Beren-
garius）を指している。
- 86 一五三九年ラテン語版、一五四一年フランス語版には存在せず、一
五五九年ラテン語版になって付加された箇所である。Cf. Lombard,
Sententiae, III.22.3.
- 87 この文章は、一五四一年フランス語版には見当たらない。